芭蕉翁附合集評註 上

俗諧のつけ句を学ばむと思ふ
者の為若干箱のつけ句をよむ
べし若干箱の句なほよむふ
古の箱古が所らり多る附合
集よりよろしかあらば箱古が
いさを大なるなりけり石
ハ学よりつけ句を古法なるもの

[illegible]の附合集　[illegible]うばふ
[illegible]の評注なか
[illegible]に翁を[illegible]ふ
[illegible]は[illegible]
[illegible]べし[illegible]が辞
[illegible]
[illegible]

芭蕉翁附合集評注上巻

猿の記

二十五条曰猿ハ発句の余情氣色の面白くなるやうにとて猿の多くら持るゝハ猿のうるゝ所ぞ

汐債尋常往不生
人生七十古来稀

汐債をむさぼる汐侍ル（サカテ）
多く俳日くゝ馬よ加馬（ノスル）鯉（コイ）
発句詩高人といひ汐侍といひ詩人面

後の何りさ海をのゞてるをそゝけるくるゝ
激と音まくく用ひてるよの五〻鉦と漢
白の志ゞゝたつくめて五共白の余時を
何らハしたりけれどそれハみなす栗の
俗諧とてスハ一神なり翁いまゞ正風
の志面目をはられざるハのさいるれ
バ常樹と志ゞゝ
霜月や鶯(かう)のつくゞくならびたて
冬の朝日乃何りなりなりて
此紙ハ志とふ人のかゞとゝ志る名言るき

美色なりの名のりき二句の間ふるゞ
めし升ハゝゞ名の日俗解よふの説く
志ふを解志るゝ時者却く弟二ふよ箭
体いいるるよき注といゞ大れ
ものゝ如といふハいりくいひゞゝて解れ
いひらるゝもものよならゞにを出志ゞか
志らゞたゞゝふものるり翁もこのゝ
の日乃俗諧ふいゝゆくはゞめて
の志的をはられるるやまと
紙何りされどいまゞ正風の

あるハ巻中まゝ古説の俳諧
をくるゝ所ゆゑ紙筆墨よ此
所らきものゝ中にてこの紙鶴のつく
たらびゐくとゝ白づくめに洒落(シャラク)なる
顔字(ムジ)ふてもゐ面ざしの所なりとて
ひ伝したるゝ紙を紙の筆跡とい
ふるもく紙寸三ふ寸巾巻の三跡
所ゝゝゝが師系更年さけるゝ有
るゝ発句ハ天ゝてかゝちたゝ記もの
たゝ紙ハ地ゝてのさるゝをつら

ちどり寸三ハ人ふゝく訓ことをつゝ
どる紙ハのさるゝをつちどりて訓ら
ばるゝをむねとさるゝものたゝ紙ハたゝ
と訓らばる顔字をもて面るゝを本
式とさて本式ハさるゝ所ちさい跡るゝ訓く
まゞさもの、訓くハ墨式たゝ紙ハ此紙
のめくたりりゝを或ハたりるたゝ
もゝも訓くかなもて面るハその跡
又ハ歌巻風吹のたゞび顔
名とも字ゝらばるハ行跡たゝ

紙とハやゝかりゆゝ飾くるをあふ飾くがなる本式なり中ゝもらむなどをまゝ用ゆるすハけゝも飾くがあれなりまれ弟三のまい外なりの假名ハ行舞顔字ゆるゞハゆの舞なりけまいり草天地人のことわをまゝらざれバ紙弟三よ嘱し此ゞ極式といふものハかゝるゞくかハるゞらざるものよてかゝれバ白づりかゝゝ以よなりかゝらざれハみゞりと

世ふ宗道なゞいひゝく仮階を言ふ者何ふつけ固ふつけ侍ふ秘侍といふすをつくりゝく人を拵びゝく侍ふるすハ人我はりて價をむさぼらむとてのまゝりざなまをまゝハ仮階ふ侍ふ秘侍といふすハなきものゝことれハ何づらぬすなすゝ一大すの秘侍のやゝよいふ者何まゞこがまゝ内ふいひつ

檜笠三面を人下のやどり廿

稽一つゝね　ひとつゝゆく

発句接笠ふ雪をいのちとす

の旅人ふゝち原ゝ稽よりてゝゆ

さとやゝ乃けきをつけたるゆゝ小

行舟の紙なれり

時ハ秋衣地をこめ　旅のつと

厚をとゝもねふ　雨ふ風の月

発句ハ道おのの白ゝり時ハ時とて秋

のあり小ふ杉ま　ろき時不ハ不大和路

此ゆゝきに　ほまき　へ衣地をうけての

旅ふ小バきハめゝ　ほ小ふるゝ　なぐめの

つゝも　ほるゝらむ　なつゝくゝらやまゝ

ゝろ　ほ小ゝ　ふゝろをゝけゝ　ほ小ぶ

つゞ多生　流旅より旅ふ　ほゝ　へ旅了

ゝも森ゝる　風ゝ　流水のゝるべき

多を　ほ小ふめゝ　ほいゝつの紙

なゝて了を　旅よりむゝり　詩ゝも

ふれ小し

江戸桜ゝろかよハむいく　ゝ　ゝ

蕉堂の　西相　平か一ゝるゝ

公和ハかへつゝ江戸をさしあゝ
しほどの人あるをバ時々面々のこ
江戸をバ思ひ出ぬふらむ〳〵いへるこ
を時々ふ揚〳〵去をわゝる他之紙も
そのほいさつをゝけ〳〵いうも薩摩の
重ねふかつゝゝるとゝわゝれも古調
なるをバけゞゝよハ解しがゝ
きろうねふ恰をめを家教の薩
一羽わゝるゝ、ふるひゝむれ
きこえゝるまゝよてくわゝく解まるふ

及びね
時々〳〵ふ盜かゝ亀むるの尾
犬 徒の はふ 俗をつゞ人
発句男ハ尾をゝて出りぬふゝも
門の盜をバわゝをふかし亀ぬ〳〵時々俳
度〳〵ふハ男が留るにゆゝて法多
をたのまむて俗人なゝらゝゝる
ふ紙されバよわれハ出ゆゝも多てき
犬徒に はふをたゝて時々をたの
みぬ〳〵いふゝゝろなり家。あれ

分貞庵をめぐり昇降したる後を
つぐとハ滑稽のことバ
芭蕉翁分類白雪編加賀
月と紅葉白八公羽の　芭蕉翁
面をさく　扶うるといへるを
うの白ふ茅編かへのているや俗の
古風の一新なれバ他にいうもきとり
がゝ　紅の月と紅葉ハ何のもなれ
たゞ風流なたつきゝ　俗のとゞし

てゝ何のゝものなりけりけてかの
芭蕉翁分しゝ白をたゞ翁分して
盥よ面をさく　扶うるといふ白るを
句のゝ一ふ芭を蕉翁かゝるを不白
のゝゝバよりゝ　芭蕉翁分し
てゝ何やまの分つゝたるなもて
いふ説あるをうちきゝてハやまらなれ
ゞ出ずくゝ何るを見ゝ者強すなる
ゝ何きらけ
宿まゝらをむ西山ならバ秋の

芭蕉とさゝふ風の俳号
桑白ほいさろをそこに惜西行まさば
ちこ宿すねらをむと向うけるよいや西
行のめきそるさ物りをすてハ春
芭蕉とやゝくはふ俳水安さたり
なげ形る者よてこうはとさゝてと
る紙なり芭蕉風の俳号てい
へるひぐきゆゝふやたゝ桑白も公
の学よ西行をうらやめるるをゆ
ての俳なり

花の咲多なぐら草の公ふ
秋不しはを様のくづを風
桑白ハふろさんをふこゝる俳公公の
オイリタ　ヲ　ヒ
方加俳保なる紙見くの水はを
ゝゝ世ふ用ひしめバよ人のからふ
て園の　ヨリ　ヨ
ゐ　も　ゐ　ゝ　ら　ゝ　む　ゝ　き　人
おなるを芭蕉の中ふかふ水くや
水形紙ふ花のゝふちをゝからぢや
さふどろの人よとりくハるく水りが
たきちんよこゝたぐひなく　ミヤリビ
　　ヒ

したる古ろをかくやうにかくのごとくの
の名ふ花の咲てふを秋すくるあつ
うひなる紅ハ多城人のをしみる
にたとろきてこれハ加入くる古河
秋ふたゝ懐のみる気もなきく
づを作る赤ハ多くこれへと辞儀
謙遜のことバなり他者の白をつくる
十七字十四字の間ふかざりなるべく
ろ所ゆゝに上をのべるがめし後ふな
ふゝ古ろをとゞ矢よ

師の橋むかしの拾ハむ木の名ふ
古ゝ紀ふ也おの 紀 四十一
桑白紅ともふ古河なふがきえがく
解しなたりとも毫のてく
霜の宿乃旅森ふ敷屋をえを
古人かやゝ乃 枝の末ふ
桑白ハ色をさせおの者ふ色をやちの
もなゝ時ふ枝屋を色をまね
らをむいうのあぢまりいぶせゝ行ぶ
さむと所いさろしたるこまゝふ枝屋

をゝんをゝるふハ何ならねど是をゝ〳〵ねゝ
ものもなゝ〳〵いふことをてうゝいひのべ
たるゝ紙ハきぐゝよその何をゝけてさる
のをゝひろゝ紙ハたゞひなゝ紙ハもし
ろきゝるのふこゝ何をきゝ古人もかゝるな
つゝきゝなふふゝ本ゞゝをきし
るもこそさゝつゝゝたゝ紙とたゝりよ何
ゞかやゝのゝるゝ何ゝといふことハなけ
れど何るゝだきゝあゝゝ何をのべるもの
なゝをむのゝまがゝりなゞふこゝろかゝる

るハ何ゝ紙なゞ源氏物語なゞふ松ゝ
なるきゝろるゝ物
貧なゝよ祇園まゞ〳〵五三ね
竹立まゝゝたゝやきて庭の卯の雪
発白のつゝゝゝ飛ゝゝきゝこゝかゝ
ゝゝをゞ陰てとゝバ墓なゝよ公園の赤砂ふ
ゆきゝるゝ道をゞ門ゝゝ五三百赤ねて
とゞまりのゝふやゝたをゝゝいつゝこゝろふ
らむゝ紙ハたやゝやその赤ふ入ゝゝる去ゞゝて
庭をゝゝれバ垣根の卯乃花ハ雪ゝて

ほやまぶよろづかもろく住なすたぶ
旅のうちをもたゞさむるなりとて不
免ることろとろとの花乃雪とハよあれ
どおのゝるこいろふるいまゞすぎ仏道
まてかくつろぶかまぶ古
祖の味真まくよろぬことばるり玉べ
く篇の白ぶバとて手安くぬなりと
おゞえるハをろろなり古祖ハとろ
ぬ白もおくこころ
めづらや蕉の中乃公羽中

漂ゞの茅(ちまき)ゝ手たる冬梅
発句蕉の中乃公羽をこつける
風情ゝなゝ白上るふ冬梅成漂古
の影ふまたるゝあるの扇ふをゝハを
たる扇東王
蕉の落葉ぶかど能をほゝろ
旅庵の素をみまる脂(あぶら)ぶす
発句蕉ふ蕉ふ蕉時ふなどいふゝゝバを
蕉の蕉ふゝぶよりまでゝあるゝゝゝるも能
をゝ廣くいのゝる行なり蕉蕉の

中をふるくちまぶくの旅ふつゝんゆふらむ
ぐろ孔ほど袖もほころびぞ旅ふやつゝき
ぬふりきも見えぞちをさんふこゝろといひ
なくちめたるあくろん孔ハそれをうけく
いやゝ古都もごぞぐらだ旅森の雪ハたき
ふやつれてゆくハ脇をきらきてゆどのす
ゆりよおだきよゝこゝくたるく
雑飯（ヤキ）や伊吉の雪ふ嚴（クゲ）きむ（ル）
砂きゝうめゝ　わづ笠　乃旅
発句はきゝおらゝの旅ハ雑飯も伊

吉の雪ふ嚴きるむきゝめく紀義
ぬハむハ出ゝ八きまのゝら又ハをゝきふ
くもゝゝらむと俗人の旅をつゝけるく
あゝろをゝけゝいゝもおゝをのめゝ砂
をふゝて来ゝめゝハきゝめゝときゝんた
る孔なりきゝびゝく発句孔八人とハ答
きゝるゞめく或ハ人ハふゝゝへ或ハ人のゝことばふ
孔ゞ或ハ人の袖をかゝていやゝちよハ
ゆらねといふ孔年五斜ハ斜の袂ゆれ
ど発句ハもとゝ滝（タギ）おゝて俗ゝをいひ

出むもはるらぬ紙ハそれよりあとぞるお
なれバ人のことバふかぎりなきぎめくその
時〳〵のうつりきよたちぐふちきバ五節ハ
節ハ九節十節ありてきるるだらぐぞ
あつぐるかるきぬなどハあんのんよりあり
ふまゝけてきあまてものなきバあるがち
にかるべらだ
いろ〳〵の名もむつゝや春の竹
〳〵れ〳〵餘ゆるなそちあるる
俗の草節の紙なりあり桑白紙ともあり

のまゝは春ろ紙をまるぐ〳〵一のきら
けゝなれ二十五条ふ始るあり
はるまふわが宿せまゝ紙ハ
えぐ矣〳〵かたる風の草
桑白ハ公相よまらぶ〳〵赤者を畢下
ゝたる他ふ始ら〳〵紙ハそれ紙あい
さ〳〵〳〵宿へまあり〳〵ふれバたぐ
矣〳〵かや〳〵の風も草り源ゝきふ
ろ〳〵ほめる〳〵なり風のたきものつ
〳〵ゝ〳〵ハ他階あり

あらふ蘭(ランタン)よりたゝまの夜化粧

田植うまに　旅乃　新蕉

発句なれども田植のうたをつけうゝ
うゝ紅はたゞその切ふをつけうゝ
なるべねもまづうゆゝばからびずや
酒　さつひなるらふ　はごろの月
はは酒もまたゞよハほらゞ　屋ぐねのから
びたるをきゝつけたる事社(ハイ)が蕉に秋
夜蘭(ランタン)なるまで　酒さつひなる歌らむ紅
のゝけうさかくゝたるゝにまたゞし

たるゝ屋ゝてみをばやみ流の田植唄
公之ほらたる免むふ　彼のたゝぐれ
発句ハ旅人よ事田ゝゝ蕉の田植唄
をきうをむとゝ紅ハ蕉をこゆるふハこれ
紅成ほらたむていふ和ふ成ふくみく
わゞめき蕉(シャ)紅(ベニ)形紅のほらゝむだき衣
紅もたゝれバふ彼の蕉をるるふハせめ
てゝ公たうゝもほらたる免起ていふゝろ
をたゝぐ紅よ公ゝかけゝり　は紅を世
ふ粥(ゾウ)俳といふみ流といふふ彼ゝ粥

田植よりぐ水ぐ對しるこゝ
見をバやなかなをちぎる彩の畑
ゝの緑をゆゝふたをらむゆゝぐ
こゝも拾ふ附るゝたのゝみハゆゝぐ枝の
ひさぐみ所ゝぐバてらめハふゝのゝて
いつる田家の所のさ海見るゝめし
時ゑゝやい花まで流る 桂笠
宿たふた 錦をとむれ わらゝ
発句ふゝやゝふきこゑ花の沢ふ桂笠
を見ゝたゝ事のゑいゝゝびゝ志ゞれた

所ひたらむゞ人まで流ゝ花ゝ
末ゝふとゝふゝゝゝ石ならバきぐゝ時ゑて
やなゝゞゞ又ハきゞゞゞやゝもきゝゝ所ゑ
ゝゝハ度くゝ時ゑふ所ゝる桂笠ゝバ
植ゞてもゝるゞきゝ花の沢ゝでもき
ゝ流りゝゝ彩しゞげなるハきゞゞもゝ
のゝ色ひたまハゞゝゝゝゝゝふゝゝ
らむゞなゞゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝる
ゞき紙ハ赤ゑ角を結ゝたゝゝゝゝゝ
錦のゝるべなゝき者成ゝゝゝふ君ハゝゝ

草のめきん　ちゆ〜ぢ喩〜てゐいさん
たるなり
奥底もなくて冬木の梢ふ
小春ふ首のうごく蓑虫（ミノムシ）
あれもゐいさつの登白ゆく男と赤ハ奥
底もなく〜冬木の梢乃めくさうぐく
まぐくも見えさく〜やく〜にいえかといつるん
なくけて俗のわが身を薬師（ケムジヤウ）し蓑虫
のやく〜なるさ方も男が面りれみのふ春
ぢゐ〜まゆふ首を動さとふ紙こ

わきもちびよ梅より奥の藪椿
茶の湯ふ飾る　雪のひよ鳥
発句ハ椿ふならぶ佐山木といへるこころ
〜〜椿の句奥なる藪椿なるべし椿
ぢ風流ふ面やりゆ〜わきもちびよ〜の
面いさつなり紙ハちびよ〜いつる紙より
茶の湯とつけれのきぐ身をひよるこ
なること
つが椿新剣（カケニ）　枇杷（ビハ）の度茶ふ
見（カケニ）ふ動く　山茱乃花

さきも梅ふ附のうぐいすちるえだ
梅ゑみえうく日ふし　梅をいくり
東の宮乃　宮　森よつゝ
発句ハみのゝ山のやまさくらハむ
そいくらゆめゝゝ花や咲べきといへる吉水
俊成の俳　賛のことバをかりて梅の
花もちりぬしし　梅ハまゞ咲ぬ　はなぐもれ
日をいるよりちらむとゝゝろ之　梅ハその
時ゑのやうにそかふゆゝゝゝゝゝ
かゞし　古歌の詠の紙なり

いくゞと複の花ハ袖ふちる
ひらゝゝ梅を　梅ハ　梅のひとつ赤
まことふ山紙なゞハ発句をたもつる事
ぐらさゝ　ハさよゆらぬ　さぬ　紙の梅
じかくさ山句のめくなるだしつゞく複
の花乃袖ふちるハ梅のひとつ赤の梅
梅ならでかふいづこぞやひとゝゝゝゝゝ字
つゞくふよゝ　ちゝゝゝゝゝ　ちゝらゆり　嘆ぬ
ろ花ゆまりゆゆ
加　ちよ　さまふさて　右の友　雀

秋をこそ待てふるねの片枝

これも発句の所ゝをつけるまでゝ

白露ハ時らの雨なり発句を紙もよろこ白と

蜻蛉（トムボウ）の壁をかゝえる西日ふ

汐落うゝる茅の穂乃うゝ

発句蜻蛉の壁をかゝえるふハきつあて

浦風の所例所と見ゝ茅の穂をいひ

西日といふ汐落うゝるゆゑ所のりき

をつゝ茅の秋茅の風蜻蛉壁ふ入

をぬとやいハむふゝ心をつくべき紙と

文鳥の羽もかいつくろひぬ卵ゝ風

ひと吹風の本乃墓をづまる

ゝ茅秋の紙なり二句蜻蛉の中

ゝも名育をゝ俗諧なれバ白露人乃

よゝしる不なりゝ蜻蛉ハ俗諧

の法（ホッケ）毒ゝ たゞこの一ふふとゞ留ま

ことふ風の主面目といふべし

市中ハものゝあはれや夏の月

暑しゝゝ川ゝの夜半

か一さゞを蜻蛉の俗諧ふいゝわてハま

たゞ〳〵凡の的こゝにあれば人々るゝいつもたゞ
なつきこゝ負るの月八涼しくこゝろ所なるべき城
市中のものゝ多くひたちば暑さらめかく
るゝことつまをたゞへず苔白をよく見さぶ
炎〻〻〻すぬゝ怪雲陰引きたゞらだ
涼しゝといふハ山水の沢なれ
灰汁桶の水下やゝ以ものきりぐさ
使ひさてゝりゝ青森さる秋
発句蕭〻瑟〻の趣を見ゝ沢寂〻
莫〻の貌をつけゝり灰汁桶の水れ

落やめバさゝゞ〻さのゝ出て去つゝ所八陰
ひさてゝりゝ青森さるをれものやゝり
なるゝ恋し
茅出しより二葉ふ成る柿の実
畠の茅ふかゝる柿の花
翁去来ゞ翁柿食ふ常毎の時の仏
陰ゝりゝ発句八翁柿食を頂さゝ
沢八ゝゞ芽ゝ所ゝり
去来の儀も所のやや生大根
ゝゝ所し仏能るふ宮の猿

発句をも菓子生大松のとり合ハとをり
知仏ありいろのもと大松も生きをきら
むかるる家ハかるらぎぶ宮ちとめてふぐ
ら紅ふ線の蔦をもくるる山迫さ行るり
の古家と見てくるる紅之
春風や麦の中ゆく水の音
阿波いさむ花乃名ぐち
春ろと二句の間をふるふるり
菜種干さて蓮の蕾やゆふ涼
宗因　鮎ゆく　紫陽花に花のえな

あてろこふ二句の趣を景をバ都を三里隔
なる生麦のさとふたるれ宮なるゲ太い
ちひさき川なぐれ立ちしの蔦蔵ゆた
てたハ山なるべし　宗の庭ハ蓮を蔵て
菜種干たるよそ蓮の蕾ぐ　みね
まりて宮人の家内の涼をあるさ陰
やがて太の居をとより宮のちらつくを内
のよどもの見つけ　蓮ゆく　紫陽花
ろれ蔵げふ咲るなら
蠅なるふたや初秋の日数多

蔕もろら吹　帷子乃殺

時分のつけたり

新書ハつざしさて矢ぬ首金子

まゞおはの穴たるりなり

俗の美紙の紙ろくわりの結をろく

いひとりし白なり

帷子ハ日くふさまゞ賂の奉

籾一升を稲のこぞ伝

かゝびらのさはじくなる紙ハ賂の奉

しきりふて紙夕ハよりゝで添りるべし

紙もろの時分を所をろく稲りり時をつ

けゝゆりけて稲のこぞ伝ふ籾一升て

よく左ふの拍紙をのべたり　東山の美

れ公羽のはらりろくハ白なるふこころこひ

むべ奉り

所の孔くゝ米ハ海ゆ　地ふ孔

雨住乃かしらを所ゞる栗の種

秋晩のやゝふて西うもとりがゝ地ふ

ハ所のきくゝく海ふ所のをゆく時栗の種此

中よりぬつゝく公落のかしらを所げた

らむハめぢまゝきてちやをむまぜて俳合ハ
二句一首の奇と見るべしといへれば注解
もかく一首ゝ〳〵ちとをるこ
殘る枝ふ拾ふて蓄る枝を多
餌蕃ちぐらふ足まる閑舘
時分と枝ふとの狐なり
秋の月れ先〳〵ふ岩屋多
之狩ふ森や〳〵ゝ萩に森や〳〵ゝ
俳の葉紙ふて甚酒落の狐なり発
句ハ切先〳〵も秋晩の海邊ふく人里

遠く家も見え雲ぐ岩屋だそりゆゝく
さびしけつぐしたりのさまなるを風
猪のひとり狐と見るかくハつけるるら
雲豆の花咲ふ寄の狐
雲豆の水鶏乃はする澤水
枝ふうるがめし正風のまゝ中なるべし
猿笠ふ赤れる赤る赤乃松高八
日ハ雲ゝ乃れどゝ赤づゝなるゝ
発句ハ猿猿笠ふのる時の白なれば
さの猿笠ふ松の月ハ赤ゝ雲の松高

きゝさゞめ〜とつゝてろをちむり紙もう
のゝてろをこのつゝひたる鼓所り

第三の部

詩所きむぐ年をむけぐる酒俵ル
冬船日ゝ〜ゝく馬ふ加鷺 鯉
干(ホコ)鮭(ニヂ)き夷(エビス)ふ茶をゆるさてらむ
紙の部もいつるめゝこの時ハいやぐ〜西風ふ
入らぎわし時なれバのちふ正月のさゝ面目
をたらるゝる時の俗諧ハ何ひぐ〜これ
我庭個ともみなり栗茶ともつふ白ゝゝ発
句すり学三まぐく漢のさぐ〜よつゝゆた
るなわりをべて古個ハ漢俗諧などを

ゑゑくつゝふるをめづらしきてのふまたりゝ
るゝと見えたりけり水どけ発句ハ甘々角ゞ世の
詩二の哥にはそぶ人を仰ぎけりたるまて紙屋
三もろのそろはのゝといつりいらゞたらむ
紙雪乃こゝ―も襪ゑゑくゆる
雨相ふまゝさゝ敷紙部のめし
聖業まで寿る蝶の羽をゝゝ
家ゝの冬の日徒解よまづらゝゆづる
水仙ハ見るゝをまに北たゝり
宮の面目平ひらゝ栗且

赤猫ふのら猫通るゆりびゝ
発句ハ水仙ハ冬のもれなきぞも冬のいそ
ぎゝ見るゝもなくて春ふなりてこゝな
ゞ矢たきといふこゝろ紙ハ発句ふ栗且の
ことバをなりゝしゞ早まゝ見ゝ栗且を
つけさるたゝらた紙平三ハゝまゝ―末の
るふゝめなゝゝ梅の意をつけゝり平三
の粉―やゝみふかゝのめ―
梅たえゝ日も―梅いまゝゝら
東の宮乃屯葉ふつゝ

巣の中ふ蕨の顔乃並びゐく

発句紙ハ先ふ解したる通りめく事三ハやハ

ま紙の切ふよてつけきうも発句のふふ切

らぬやうよつくりめたるものく事三ふかざらぜ

きだく附句ふ三句のわくりめを事一とさて

亜山庶やたらに旅とハ思りれぜ

雪をもくなるさて おさぐらの松

海士の子ゞ鯨(クジラ)成告る見吹く

発句ハ氏身旅ふ居なぐら亜山庶の切た

たらなるに発句をもたれ旅を云るだりめ

なりとく紙ハ発句の切ふ常のふふハ切ら

ぜ杉もーろく住なりく切るぜもたぐ

人ならぜ雪中の寒おもを懐ろ切

おさぐら庶の松ふ雪のかるをたぐむ

るさねものく者と見たり事三ハそのふ

をりたふりく紙の松を浦なてくり

なり海人のるらぜ見吹く鯨の寄るを

告るりさく附合の本旨みるりり

花の信かさバ発みの花めつらや

杉くやたろむ庵は蕨(ハキギ)木

七夕の八日八もの くちびるくて
発句八ほゆの書たる紙 紙八その切ふ事
三度の節本を折るくや 折むてい少ふを
昼夜ふれ 修然ていたる 弦の又云
なり 度ふふ 笹 掛の薬などのちらぬり
てて七夕のなぐめを見きる風情 事三ふ
く見えてもちも 義の 伝 ちさだ
名人の 修 心をつくべし
小 傾城 ゆきくなぶらむまの義
浮ゆだるゆふかめのたきもの

吹きそうな 待のひぐれ はるみく
発句八其角なり かれ 人となり 溺を
不羈ふ〜〜世路を 蔽むづつねふ 土 原
なぐいふ 青 樓よ 俳 徊 て 酒 徒 年 重る
るを好 ぐ 山 句 ほゆ まこと に かれ
ぐ 本 情 の 句 なり 紙 八 発 句 を 一 擲 千
金 の 子 と 見 なり く 紙 ゆ ふ たきもの
きる 驕 者 をいふ 事 三 八 俗 の 引 掛 て 紙
ゆ ふ たきもの きる 八 なり 人 ならば まこと
けきる 人 乃 や きふとゆ なり たを

きらぬほどにふくべなるその庵
火をうつるなり　冬のうぐひす

一　家の住るは人に於さすわく
発句は俗人のけま　紙はその坊不まて少を
うつるふ学る乃けく　昭の似海ひくるをの
ぶく清家の麺をいひ　牙三八農家牙
うわかりて　冬の学る　紙は冬苔の紙と空
矢を三句まで　つづけるし
ぶくねもたづうふきけバからびすや
酒をひらふ　はごろの月

藤袴　侘寂　腐みめでつらむ
発句紙は先年ときつけく　牙三八酒も
アの産は家と見えく　花だうまはかくだうり
寂寞なるふ自性なるものをえでめ侘
まふうれかりつくられるとたはむ　ぶるた
面をぶく　栗の花さく　侘見ふ
いづきのそよふ　常　出る　鐔
タ　伯ふふ　袖　紙　那面に月　花て
発句紙ふうさ　立　牙三八四亦の夕

紙附なり

蓮(ハス)やゝを又習ひ見かつゝ学

市のゝ子どもの見てゝる面布

日れもてゝ笠をたらぶる涼しゝ

殿句お之ゝ京し紙もろの扇子之市三八

旅みとりゝ京ゝ笠の暑花中ゝ涼しゝ

射しゝ京さ

供笠ゝ実ゝ名屋のつく宝さら女

徐鈴ゝ京らぶ角むさ乃里

みろ供ゝ階子(ハシゴ)の溢(ハケ)をつゝひ来て

きゝゝるまゝ立ちむら

荊(カヂ)楳(ウメ)や水田のゝ一乃秋の雲

蓼るゝる日ふ代ゝ角る屋

衣ゝ〳〵梯(フモト)ハ馬乃宝をぐゝ

発句田野の秋を画(ヱガ)るゞゝし紙ハ屋を

をのゝくゝ乃ゝ市三ゝふゝろを乗ひ

たゝゝいふゞし衣ゝつ梯ハと発句紙

の優艶(ユウエン)なるを何らひ下ハるの宝ぐゝ

てゝ清聲の句故ゝゝ立ゝをのゞ

たるを後何ゝよゝく人の及ぶ所ちむや

年立ち盃ふ　松乃花かくむ
膝ふ　のとくる　梨地の木ぐらし
青の月よく　春る人ふ　宿りうく
梨白ハ　主立の　使真に　曲水の　宴乃弊び
をむくたハむきたるく　梨ハ　女房ふ　平家なので
かくわ出るちまるり　才三ハ　將ごて　きづら
なる　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ひくり　月ふ　對して
梨色かさなら　ゆる　女　梨ハ　風流の　えを
人をくめて　奥ふ　森さを　ゆるぐの　梨色　新
さくくくもせぬさのくく　高くく　森

入くる　ゆふ　ものくゆめぬ　首　年ふ
新年ハわざくさくく　ゆくて　くくゆ　なり
きのぐ　おゆ　屋の　ゆ　くくゆ　なり
馬　時の　ゆくく　洪一き　梅の　ゆみ
梨白　梨ハ　先ふ　いひつ　才三馬　時くて　ふくべ
仮　皆なる　べ一　白くく　雪　おかし
雪の　松を　ゆくち　くくゆ　ぶば　松きし
日乃出る　苔の　ふ　森さ　ゆ
下　ふ者を　ひく　船　演ふ　みくち　梨く
梨白ハ　雪を　ゆの　松を　くく　いひ　ゆ　梨ハ

冬のゝ花さぬ墻ぞるに雪のまりあさかく
はさぐるよりさ白ハ絆をむしまるばかへつて
第二義ふ蔭ず三ハゝゆわき名高き白之
公白この白をかねるゝさらみ花さゝ三ま
までまゝれるがつひふとの巻の才三才
出さるるとなりよゝ白なるもゝべゝ
西相ふ今ゆゝや小(ホシ)ト外の星れお
笛の音氷る石つさ乃格
いゝ番(ツガヒ)霍の本ゝ森る松ゝ
発句紙ゝもて古調なるふ才三ハめでた

き西風称なり俗ゝ又松ふなり
松枝ふそくひのげるみゝ小
陸松もゝ石ゝ山ゆる英(メバル)醫(カレ)
ひゝさらにぬげる松言(ケゴト)ハ丁(テウド)ふ風(ブウ)名
発句紙ハきゝ入るまゝ才三ハゝ才
ちゝ白ゝいゝ雪ちむ絆ゝ
いゝゝ立春ゝ川出ゆる嵐ふ
冬のまゝ花のふおふぐら乗
大紙れゝだぬちにふゝて
発句紙冬のゆゝ花之才三ハゝ

ふるゝ凡のたぐひ公卿のたくらひにまれなる
うたゆきなどなべてこゝに言はゝむとまるに
こゝにかしこまばらくにをつぐむのゝ
牛原さて村のはづさや五月雨
さて菜ふきゆ　梅雨の花
一　枝の蓮ふる屋森杉一面のゝ
桑白ハわづかなるをまれなるを
こゝるこゝろを表松鶴ならひて表松の化光
ふかゝる白多し　紅ハ甚ふるて村うゑた
くさ梅雨の本ちなるなるべし　寸三一枝の

蓮ふる屋こゝぶふ〳〵めい〳〵ふる屋森たる大木
の陰涼〳〵うゆゑなるべし
菜ふ屋しをあけ出〳〵れの暑さ
暑松ふ鐸の鳴る立る夫午
かちなるの鳴ぶりの人と出〳〵
桑白思つけゝる紅なるけ夫屋の面つ
思ひやるべし紅ふ〳〵たるゆたる寸三もう
のゆゝゆふ〳〵住器夫ちの出るべし
うゆふ〳〵き稲の稚なゝの旭ゝ
なるもたゝふきぞ　溺池乃水

白砂の中より礎こちらに矣て
紫白ハ古代のゆゑなるをいりふめでたきら
ぎわゝ根松もてハたゞ〻たなびひのべた
れどそこゝろよ松ふきよいひたりかく
るめでたきち代ゆゝなる国とて居も
えあしなどとうふゝろく才三八引時ゞて
白砂ちのうちより新出る礎の[illegible]
きゞ〻砂てゝいふひらひ所り
松風ふ新酒をすゝ松きゝ
月もかゝむしく石垣のゝへ

所の門遠ゝ麻乃乗ゝゝ
三句とも白ゝえ時らゝなり

第四句の説

二十五条に曰四句めハ体更大なるの句ふこ
雅ゝゝしくハ発句説者三まで云習はゝる
あゝしるべし云いやゆ句きるやゝにいひなした
きで一巻の意を化ハせ句すりたゞまるあみ美
句一合と八須しはるるゆゑく

歯朶の葉を初物人乃春夏
ふのはつ哉おしほけの春

才三八早春ふたゞめて物きる人あれば
歯朶の葉を矢のとふけてゆゝるゝ

らむゝうの物人の獲をうゝひて園のる
なのでふたゝまゝる時ふの門をおしゆゝる
りゝさるもゝえ又八せ物人八侍(サムライ)ふのわざ
とゝわたしたゝるやゝにもきこゆいづれふゝ
たゝゝろハたゝゝゝまゝ去のいけまゝき切本
をつけゝる(ツヾ)
回(タ)蝶わる物の(ミヅ)重乃ほゝゝふ
心(ク)ふ(ゲ)ふ宿ゝ八休の中道
ゝくもゝろき付合ゝり才三八物のまわざ
の切るまゝゝ去ふとハ思ひよるまゝ去を休

の中乃宿ハ世ふたゝものかたるあるよて伊
ゞ夫なゞが袖のさゝゝ見むとて見ゝ
てゝさをたるを一枚の宿をしゝろふり
りゝ田螺りる松ふてゝ家とハつきがゝきを猶
といつる一字ゝゝ甚ゝひゞうゝゝる
かへる鴨かへらぬ鴨もちハ立ゝ
七曜山を出ゝゝ月
たゞりしさをつけゝゝ七曜山と山の名ふ
ゝゝる伏ハ河し山を出ゝゝよむゞ
水せゝゝ屋森の石やなふさらむ

篠ふ絲の幸生まうさゝり
才三ハ左ふよゝ河ゝゝふて家の前に
伝ゝ川なり世川中ふ石をたきゝ夫
ゝゝ屋森ゝゝるちまゝ四角めハきくに
世河ゝわをつけゝるものふりかゝゞつゝと
つけるを一称し
月出よ篠屋をからむ酒もちて
民の竈のけぶる秋風
才三ハ光よ篠なゝゝと変わて酒なゞめゝ
河ふななゝるゞゝ者の月乃ゝゝ出ゝ

酒竹笹もちゝ仮の茅屋をかりて月
を見むと友ゝちゝうちつれゆゝしきに白
めハ家屋ハ武蔵(ブビ)なるふるゝかりまも
月見酒もわかなどの花無(ナ)るべきふゝの
らざるを泰平(タイヘイ)の世代なれバこそ茅屋を
かりて酒もすハまるれといふてろよて民の
かまどハふゝハひゝりわといつる所を忘
れるなりかつハ世秋の豊秋なるをも
忘るべし名人の殷豊(シュゼン ファニ)一ふゝのちまや
村ゐふ市の仮屋を吹うりて

所の中ゆく川杜との月
オ三のけしき村ゐふ地分の吹そひて木
のかり屋を吹とらるゝまゝまゝまゝまゝまゝ然
白めハ屋の面ハまゝがゝうぬふゆゝまゝちの京
けゆげなゝまゝある月うるゝといふてろよて
さゝうゆの方風大ゐもたちまちれて月
のてゆまてゝまゝしるまゝゝ所中の川杜ゝ
いふまて面倍のりしきいちるし
旅人の熊かゝゆゝ春蕎ゝ
そ紀もおるりぬ左刀のひさゝ

第三よき句之まへにて俳諧のたしなみ
なるべし四句めハその人がらをしるなり
たゞすなほに附句ハかろくするにきはまれり
くだし風にも居そのゝつくるものならバ
いつも附合ハ新らしくて花おもるべきを
風に力とつける俳諧の新しミを無益
雑(ザウ)なることを去るべし　は條に詳に論ず
あしく美し

掃よせて　消る雪をやかくすらむ
石のくぼミに　墨(スミ)を摺(スリ)けり

消ゆる雪をしみじみ掃よせてかくに男を
風流の気を人と見て石のくぼみに墨をすり
まて雪のながめ紙一筋などかくさまに
したり

投入ても嵯(ザ)の編(アミ)橋(バシ)　房こめて
風呂焚にゆく　月の明の
きこえける夜ながらとよきは句也
野灰の火縄をゆるさで句よみに
山の月ありて乃　墜さてゆくなり
第三の春なれバ仮名ることにて四句めの季乃

句はかゝるまゝに松のづらなる春ゝこのゝ
さをだゝく春の泊乃接句はかくあるべき
又ありて
義入はたゞやうぶいりと見をけて
すぐれたるたがら第もつなり
人時世鑑二句のつゞふつくきり
暮ゝをハえれたく梢をうけ梢く
門ふ顔出さて月のたきれ
第三いゝなるかふ光ハえれく梢こつふす
ハかゝるたゞたゞ形くにうけハづまる梢

を暮ゝをハえれたくこれもうくいひるなゝ
まで四句めハうのこゝろをとさて春
いゝ花のため秋ハ月のたあよかける梢ゝ
て暮ゝをハえれく名らむてつけるあの
なり一句のこゝろハ下座なゝでの意
門ふ新出くれをうるけまく
新月におうふ会泊故吹立て
遠くまのうちく立る生もの
けるこゝろもなるらむ
家が著ム俗を春のふまきをえれ

上のたとりに仏ぐる茶の湯
これハ炭俵の一編なり家業を捨て春
のまさきふとり付くる人ハ茶ニ高人(アキムド)の仕
合よくく器こむる茶も仕事ふ湯上り
さるるまく

第五句の新
雨住見る宮の月かさろなり
風吹ぬ秋の日 瓶ふ酒なきる
古用ハとりくからのけちをつふるり杉ぬし
苔白ハ詩人なるどの宮苔ふ獨坐(ドクザ)しく月下
の霍を苔ぐめおるけまく五句めハ秋の
日乃けびしきたれも吹ぬ瓶ふ酒けへなき
寂莫(セキバク)のりたく瓶ふ酒なきれど詩ふよ
くいるのなり
於 心立に宮をやつき新雨

紀ノ川（キノカハ）　月を海

四句めハ朝廷（テウテイ）の為めにたゝかひくひろふ
宮を落しまゐらせ給ひ給ふ
高ねかゝしまる軍士のれもうげこを白
め陸よてさろ冥べきに死ふ始冥ふ於合
なるに名ふ人ならぬ義人とさゝり
七曜山を出くは月
所づゝり栗のこげる　砂ごけ
きゝえがゝしいで
碎くゝ人の　有ふとゝりつく

けゝの賀れいで面白や　紀ノ川舞
若白酒ゝ　めぐりて　けぐめゝ　さを浮
賀の蓮と見ゝる　附合なり　老（ラウ）若（ニヤク）男女（ナンニヨ）
さるを子くめるゝろもはらむ
いつゝ烏帽子（エボシ）のぬげる　まゝ
成るやら　馬乃ほるぬほゝ
四句めハ貴き人の　ほうびなるを
白め白馬（バクバ）驕（オゴツ）ゝ　行ぎゝふゝ子の　を
をつけゝり
皆　手　ゝ　まる　ゝ　原の　霧

入月の廿日比鞠くる武者ひとり
赤白皆ゐ手物の大さ俵なとつふハ階鐙の何
ふてゝ乙原を皆大きゝ〳〵ひそうの何ゆ
くふ皆ハ手物ふぬ肌くるぶちゆく五白めハそ肌
を落武者と見〳〵にのやきまぐさの者れ
乙原なゆゝ入月のゆゝらたふぶちゝ乙原
えねどのゝゝめたゝゆゝよゝくゝれバいや
しからぬ武者一騎(イッキ)落げさゝ一ちるハゆえ
何る人ならむとの附合なり
ゆふ顔出さい月乃たろれ

雲行も秋のねゝをたぢむざ降
芋の白ハ月のゝゝろゝ時ゝくる云るれど
秋のねゝをたちのちかりめてかきゝ
里ほどなゝぢむざと降出ゝる夜かの
天竜寺里寒ふ落ゝくべき附合の手法
なり
岚ふたむ無乃細(ニハ)月
柱本屋ハ柱本ふ影をかくさらむ
芋の白を柱本屋の屋ゝ見ゝくる附合之
狸(タヌキ)成おぐさて降(ノリ)陽の弓

まいらぢふ　蓑と笠うる蓑乃月

四角めさハめ〳〵ちびしきふと見く　まいらぢ

ふ蓑のりひかめ〳〵人も住ぞ有り〳〵る

吉屋安乃ちまよおさぐきこゑ　おみ咱

屋うちたく〳〵うるめ　一枚

さの篇ハ紅もみらぞふ自由なよ

れのきに伊勢なぞふ下る時いつもは附白

を思ひ出〳〵涙もこぶるぞり吉人乃

きく〳〵なる形り白ふハきこゑ〳〵るま

なしど道中のきぐと目茶

なら屋〳〵うれし十の盃

ふ代酒べきものをちまぐ〳〵ふのるく

お白十の盃ならべたるハ光の酒をめよハ

ぬらで子のるれ盃ならむと思ひよりか

つハたで人のふのるよハぬらぢ　とこの

紙ふつ〳〵り一角もこゝに吉ぶる白ふ

ていめでたき白なり

公除　休　まぢる　笑をつぐ〳〵

鶯が一のぐるとやぶてこれの月

四角めハ公除まぢりの笑をつぐ〳〵

家ゝのふゆるるなどゝ
るりもあるくたどゝ
白るりかくさらし
ゝこのやうに
正月のたど中と
なるみそ

お市ふ人のたるる夕月

末刀の音きゝえるる居合ぬき
伏見大津などゝふふ都會のひりさな
解さるゝ

上のたよりふ何ゝる米の出
音の中さらゝとし月のを
第四白の新にいつめくを白めもやりり米
商人のロ和の時ふ價の高下を考
るけまく世ふおゝ物ゝいふものゝ
きどろれかろ
のれきくはきゝえるるまゝ
うつとのぞけば 極の 中
森不ふ徒も森て居ぬ音の月
お白一百のうちふきめくとなる春の

きるを片ほとりくろつとのぞけば酒をと
ゝ中とおもり之白めもるの物を新うち
ぢで奥の座敷ふめいく乃森不成つゝ
ぐら人ひとり森てゐる者もなく月ふむ
うひく匠のくゐるくつけるゝ

混雜の部

袈裟法衣のしたゝ
紙衣
おもいえばをふるふ
おもいいるめくみ
がくさ
遊ふ烏帽子をぬぎく
を辞ーたる人こゝ
着ハ
肝
鼠を
集ふ
雷鳥の羽
おの白ハ韓
朝州

ちらむら 桜白ハ 迎えて つゆ れ 迎えど 盃
勅 跡を送るの 序 ふ ゆる と つゆ る ものを さた
てたるよりゆ く ゆるの 字一字の 作 こゆ
彼 蕉 選つ く 詩の こを 吹
朝 鮮 ふ 西 飛 を 獨る 金 ちる
附 えハ ら で ちら む 解 を で 桜白ハ大 國 の
ちる ちら む ら
桜 入 ぬ 氣ハ ハ 十の 蒲 ふ く
出 所 ふ 胡 産 ら く 世を 夷 ちり
芳白の 桜 入 ぬ 人を 男 と 見 ふ く 書 水

ハいひ ん で 桜白 ふ こと て 男 と ち て て ケ ん
芳白 ふ て ハ 女 ち し る ゆ ら と つ け で ろ ハ 桜
ふ ふ ゆ り て も 桜 け で ら で ふ ま く 胡 産
か と ゆ る 桜 し ら ぬ 夷 ち く ふ て ろ
山 聖 ふ 飢 く 解 を む さ る
盗 と 井 の 月 ふ 俗 夷 が ロ て 洗 ふ
芳白 岩 の 緑 芳 ハ ら で ハ 粗 の 人 と 見 て
伯 夷 が 首 陽 山 に 巖 を く ひ っ ひ に 飢 て 死 さ
る ち と る ち を 思 ひ 君 と ふ ハ 渇 ー て も 盗 泉 の 水
な 飲 で く い ふ 法 を 用 く 飲 て ち ま で

はるを伯夷のめきはく潔の人もはへはふなら
むと陽春の何とかいふ塩泉を塩井とかへくる
も仮借ならむ

鶯の森を母ふけきまされる
つひふ発ん(ホッシ)ちらでおりはを
おのふくてみくるるも出ざりしるを
鶯の森をふ〻えんぞきらでほしたるを母
のさくらめくる鮮之怪白さぐふせるる波
つけてきをえしきんにさぐはぬるを
はべせるちまぐはりてたるくらはきむ花

ふるまて世をあひたるふはむなで森をふい
ひるるを母のさくるさくさぐふくさ
ちめはまくるるをくめたるたるくこと
はもくる栗ちはどおのはてよりはやさて
らるまてきくりやさし
擂(スリ)鉢(バチ)かぶる その巻の表
すはゆきれの衣乃みだうきふ
二句借春ちりさをも古調
月の袖かくろぎ藤(子孫)る藤の上に
鴨の羽えばる 扶ハ原さたる

孤一らぬ僧を笑ふら草蔭

月の白さハめく蕭條たる不と見く時の和

るふ秋ふけるりさをつけ後白狗ゞて俗

とハなれ彼ゞら後の世乃こゝろもたそれ

ぬ夏性ゆを笑蔭のわらふとハ潛籍

ふゞど蔭ハ面ハるものかぎりゝ出る

ものふゞゝりのハこゝふをゝ

時ふ山崎 傘 を傘

公世界のゞてらを賞ふ傑なゝく

ゝるるもふや

狗ゞのゝふいる夏を 夏

一の姫里の庭屋ゝ屋ハを

苗白ふ夏ハ狗ゞるゝ出めふらむるゝ

ゝゝ狗ゞのかゝ乃ゝをちゞめて和ゆ

へるゝ後白ハ其和ゆふ人ハ一の姫ゝの

ふ夏ふいひふゞけるゝゞ有りゝ里の元

庭に出ハるゝゝるゝらむ

鼾 名ゝたつゝいふ 頭を 責ハ夏

時 多 夏の 夏ゝ 帰ら一ゆ

苗白 狗ゞの頭成ゝやゝよめゝ責るゝり

梅白ハきくのハちなるべきなり
浮世ふ 俗むこ 寒 ゲキの 戯
皆ハ花貧素 ― 笠ハちむ 俵
附合ハいりてあらむ白ハ笠ハ立し呂天の
雪とハ云る詩法をもてしく仏諸ふ ― なること
芭蕉 ― のるドの 幾 たくさんよ
鷹ハくるさいらい大きもちらハざや
世の白共角ゲ 寒 ふ 呂みざさよいひみくる
なり梅白公のいぐるをひてたりみ俗共
角ふくくハたるく

鶴入の近づくまくふ 砂きぬく
ちくうひやむぐ 昔くらくなり
世の白ハきぬくに鶴入の衣をくちなる用
立をなくるたま梅白ハ 鶴 を 塞下の 鶴 て
つくる古 袖 の 廻 を 糸 を 懸 る
喇 ふ 黄金ハ ふ 繁
黒 袖くろ ― れくく めぐ 乾
黄 なが 和 出 ― 二白を ならべたるがいる
ほくつし ― のやすりならむ 杉 ぐつなし 白
白ハ 鉋 やくく ― くろ ― 白の 轟 ― いる 発

句の巻乃中の句よりて出るなハちはなるのたくひ
やむぐ暮うらみ来しいつる句の後句なり
後の黒細の句ハ詩高人事を含る酒使
くるゝいつる発句の紙代ハ句めあるなハち千
代き夷ふ家をゆるさらむといつる句の後
句なりてきゝすり回ど巻まもなくらぐ代ハ
黒細の句ハ予四句の終ふ入るなきをいつて
〜〜ハ二句をバあらべるむいゝきひがこ
とゝふなり
裾蔭紫栄幟の角を巻形む

賢沖を使ときて荒海の嶋
お句ハ琉球國なるの浦名ハ奥のさまゝく
後句をその所〜〜りふ魔法を行ふ者の所
らむとの附句と
弦の弓元 猛き世ふ出よ
虎 懐ふ 姪る 所りつき
お句ハ猛き世ふ弦の弓を引つなき英雄
出よゝと後句虎を懐ふ〜〜ふきゝ負て
姪〜ハきハめて弦の弓元を生むとゝからの
お伝なるふ形〜所るれもなげ有り

山寒く四隣の麻をふく風
うづゝ火きゝ入る　指乃とゝもしび

いゝぢからむ解きるゆゝさハぞ
西行を　偲ふつゝむ一のやたゝ
哀いとふ宮城野のぐさ吹洞るらむ

お白ハ花女ぐの古ぐく後白のぐさハ萩の
ひなことばかり世ふ萩の花ゝいふ餅をぐと
餅ハ萩ゝもねかるてハいふゝ
みちのくの乃東さらぬ石臼
武士の儘ハ森乃くらん

前白みちのく東の石臼をさへ見しらぬ千
後白ハ東の安ゝ永なるさな菖城の大君ハ
いゝりぬひし　儀ハらむ

庭のかぐり　史たゝるたそゝも
宋女百　玉のち　練のゝち　家を
庭のかぐり史乃新ゝさらふみ出るハ後な
らむとゝふを哀白ゝゝかぐり史を濤士のたく
史ゝし　玉のち練ふ宋女めゝくたハふれむふ
風情ふかなるゆ白ゝ
松乃さぬ宮に　枝　のぐく　松

傘（カサ）の陰ばかくらしらかさぶけく
苔白宝の戸おろさぬこゝろを傘ちりぶ
仕すーてゐる所をみてゐる情白く
庭をたつ蒲倉山の栗原し
走ばるたもと哉　白ふ風葉
苔白ハ庭をぶく仲仏ちちひく極食山の
おくふりこもをおる人ともきゝえ又ハかまく
ら山の仲仏にちひををてたるもこゆ
いづれ方ぐやらちらむ恒白ハいづれを思
ひ入りて走ばるをもふ又風葉の白ひ

白ひまりくわりゆくくゝを動れまぐさを
もみせつたる庭の情るり

鳥　鳴る道

殼（ケイ）うつ方ふ巣（シ）成出狩り
楯（ナラ）の巣よ赤ム（ブム）ム巣成出狩り
茶白殼うつ方ふ鳥の鳴る清水の地いり
ふも恒士ぬぢけ人の住ぢを所うもを空め
世ふも人ふも見をぢりれををかム巣成出居
るけまの附く楯の巣ふかくハをかぬぢけを
ざをれぢをらの巣ふよ石をし　たぢ掛（モウ）楯（ナラ）
よてれの巣よをいふも同じるりけまぢ

猫の恋ふ哥かくるの面をバ深なさふも
ほらだ

風の音ならぶ薙鉄乃いろめく

大口哥さる庭の雪掃

哥白薙鉄の大なるがいくつもならびて風
の音はいろめきまでの庭ハ平人の家
ふハほらぎときして庭の雪掃ふ大口哥を
さる大あのほめさなをつけるものく

みりをのぼるから梅ふの哥

徽 花の徐はたはさおく

いかなる附言ぬらむきとりかぐ古調ハ紙
ほむねかる白なをを

世の才を画ふのぶふさるる茶の姥

妹がりら乃からわやたた

哥白ハ画師ふハほのらで画をなさせるすまを
ハらでかさ一化茶ば意つて画ふふけ物る座
居などのちまく後白ハ画ふかける女の髪
はからふゆひさるといへる附白や

髪ば花きく屋の教風

俳の風はなふハしくおくりて

前白ハ京人ハ面ゝぐのゆゑゝく敬まで金
ゆひゝり森ゝてねゝ百代美のもれ松ハ
ゝくゝく去嶋いゝちゝむゝたきゝ内まるり
ほ白ハさゝ片ゝよきゝ白ゝてたゞ敬のりきを
つけ絶波わゝめの袖美の松やきゝのゆいひ
たるのゝなをきゞ京白の次ゆつのゝるれ絶
波とやゝゝくいひゝくゝ面いゝゝひたるゆ絶面
ゆゝく筆ゆさつゝ内むや
餅 二かさね えすゝゝ常
吉原のちまゆゝのゆれれひゝむ

前白ハゆゑ枕の敷ゆ餅を用ゆるゆ源氏
お流なゞるも所なる餅ゆゝく何まれかすれえ
ゝゝ宮ゆゝるいゝひなゝべし後白ハ吉原
の妓女乃いゝひるゆとめあたる
わゞ庵ハ野ゆ宿ゝ内ゝて
餅ゆやゝまを見てゞ身のねど
冬の日れ低階ハ家ゝの住書出ゝゝゝ
ゝゝれどけつけ白を所る人の淡ゆ野ゆ宿ゝす
庵の人れ餅ハやゝゝ見るハゝゝしかゝる人
を庵ゆかゝまゝゆゝゆゝゝなめゝへゝるゝゝで

きえぬ卒塔婆ふきごくと法
衣(カケ)法(ボウ)の焼きしく火を焚く
芭句中しふ卒塔婆のみ字乃きえゆきぞ
べもの思ひも落らめ〳〵ふ俳ハ目の前ふ彷(ホウ)
彿(ホツ)とくかすしたたる〳〵ぞ恢句ハ
墓守の火を焚おるけまえきえぬといへるを
紅法のひぎぬときれぐ〳〵
二の足ふ迂漸の花乃ちらめきく
鐘ハむぐらよと ばりの蔓ゆむ
芭句二の足とつふへわうもし 俳ハ鄙家(テウ)俳

からばりし人の君もうれさをぬひてみづう
らを足となり 君乃出立(ダチ)拵とふちひな
体人ろの足ハ
裏へ〳〵ら或ハむうしハえづり〳〵きし人の乃〳〵ハ
里ふ下ゆ多之恢句ハきぐれろの人ほて〳〵ふ
多ハ様の薩よ出るあるし かとち法さよ
今ぞ 松の矢を放つ春
盗人の記念の松乃吹をれて
芭句ハ思ひまつけ 松乃矢をはるつふ
たぐそのを京ををつけくるあらし

何ぶしさの遥るもとけし時ある
秋水一升もてさて扱ぐ
茶白ハ扱さぐら遥くなどゝ扱ぐるを
さ扱といむとて秋水一升とハつゝかるゝ
水時計のるなるべしなのれ低階ハ
まゝ古湖の極臭何をゝかくむつゝく低
わゝるれなゝし
巾ふ木撞をたさむ琵琶折
牛の跡ゝふらふるのゆゝぶれふ
茶白ハ詰人儒者などのからあさたる姿

なり牛太人の何げつらひ升ハが復紙い
ゝよし
庶ふけゝく語ればいとなる男
線ちまたげの炬を強し
茶白きゝえたるまゝなれどをうたれゝ
後白ハ出いゝこのためふむり線ちまげ
られゝるるるるぐ思ひ出ゝく炬のるゝなゝ
出二白たれきく傾城賣女のるふゝく
めれどろれふゝとざゝるよゝろうのるべれ表
ふたゝく復さるハゝつゝる

昔日八敵平　首　おろめをむ
小二たゝふ　ゑ　ゝらせひとつゝさひ
茶白八まゝに戦場の白なれど惟白を
陣中のるふゝくハ下のゝらだきだて公白八
附白茶白のるをかゝゝ去るもゝく附るる
松多しけ白のゝてゝろハたで酒まめの席ゝ
粹変のたハふれふ敵よ首れゝめ出るまれ
ばどゝるけまるてゆこたゝいふ名ハまゝれ
他名をれバ軍出ふ下るべき名を変るゝ
松心おふ餅きゆる宝不のゝるる

質起ゝ鉄の燭ゝもゝゝ
ゝれハかぶろいくゝらのまぞかハゆきゝつふ
ふ松ゝまゝつけゝれバ松女の宝れ下去ふ
るるゆゝらゝし惟白八粉ゝくかの松家
ゝ一きハゝち何ゝめるるふの宝ゝく宝る
白へるやけきけゝまをつけるゝ
三味線からむ　子彼の家人
道きゝらゝみ法でおけ月る墓を立る
凡粗の旅人ゝるゝだし
月ふたくゝる庵の脇の砦れ赤枯て

恋ひきぬ 石 隙 俤をまつ
こ小八昨 家更ぶ 解いとよし
茂の実つくふ 京 保つちわ
袂より 硯をひらき 山 信ふ
山のたくきまのひ 拾くつ 昆のりきおくこみ
見きぐーがくき 泥 濡 きれバろくらの石
千 綴ちかけ 旅 沢こわ おいて 詰るれ
ちれよむきぐ
灯 能 ふくふ 痩 くらぶる
京 萩の きまのふ 力を 撰びれず

灯能ふくつとふ京 萩と 對したる
石のれなるお 撰 ちわ
まぐきと 辻 律 法の 水 嶺れ 行
俤 嶮たる 魚 見 ぬぐ 紀けて
つふくふの石くふ 石ぐたる 大 魚の 俤をく
ひたりしれ 石くまぐ 射き 茲 向るわ 伊
くのあよわ 伊くの 俤れ 石ぐらをたるひ
たるなで きおぐくめの 俤をはわや
これ きくみきこの 畠くいる
くれ げふ 嶮 る 京 萩ちわくと

春之目前
三月の牡丹乃園の笠めづらした
襟(エリ)千 高(タカ)雄(ヲ)ガ 庁 彼をとゝ
おなじ白ハ雪のたハむるを見ふ三国の笠見てる風
騒の人成保乃引らへ〳〵低株翼のたのもし
ふーたる化をゆ
けーの一言ふ名をとゞさて 禅
三日月乃東ハしらく 侍の春
前句ハ一言げーのたゝ春たちゆゝを見て
大悟(ダイゴ)ーたる春ゝ 惟句ハ三日月の出るゝ

ハしらくて侍のごむ〳〵ゆ出るふいより〳〵 禅
固(ゴ)をたゝるゝ
さゞし飛(ヒ)寛(クヮン) 花のかげよ 入
ゝの屋(モヤ)れ日を 赤ふもれなるゞく
花にとゞしゝ寛花ふ入を西行ゝ〳〵ねゞ
いくハ花のかげよて 赤死むそのきたらぎ乃
屋月の沈ゝい 寄を思ひ出〳〵 西行きその
屋のるふ赤死むゝいゝ 花のしもたるゞく
ゝのるに死たーゝい〳〵 ゝるゝ伊のすを西行を
ゝらやゝたる公羽のたらりゝたり

埼らんぶくゝゆるゝ鶯の新音を
火たゝぬ火燵なれ人越見む
茶白八咎鳥ふたゞ〳〵人の来くらゝる夜
をいひたる之火たゝぬ火燵にゐるも来きま
じきものゝ〳〵なきを人の伴をうてゝ内ら
ゐるべたけ〳〵きあらむふ茶白の来くらん
たる夜を死りゐる人にしるつけ白く
冬まつ納豆たゝくなるべし
花ふ位 椿の徼とまてゝ見ゆる
茶白秋季なれば花をゝ作りてつけ

たるものなり白ゝ八いゝくならむ解がゝし
亟南ふ桂の花乃つぶむは
菜の河ぶら ふ 焼ぎ ふゝつる
茶白桂の花ゝつゝみて月をきをたるよ一白
の根絮からあきたれば菜の河ぶらの新き
ものをつけ〳〵河つゝひたるゝ菜油菜膏
とて使ふゝるあもとぞ
鼓を 人 矢 茶よ のゝる
宣の日乃 旦を 飛 沢のゝく死て
ゝ不白年茶よの之ゝいづちよや又八たゞまゝけ

たるよや恢白ハ飛沢が名残くさむしての
いのりは宣のるくく起くけ花の子を巻
ほたまかり

閑さてる曉花みかりこまを
指衣の下ヤ　曉くる　春風
花白をよりの立なごくみくめいく曉の
閑ふむらひるたま成軍の出立ハ伊ら
ねどわるやらちらぬ世なれバかりふもおの
見をたるくだ伊之の下をうちよろひ
たるさぐくく

磯とは土重　巻系　切手ゆく
秋の沢旅乃ち連歌いとかりふ
砂とる土重のり巻きりふ巻ハいくよもちを歌
の席なるべ乃ぐ花白のやくさためくたご
ろうなるけ　ろくもたらざれバ旅の品を歌いと
かりふくさまりたるく古人の人を用ゆる密
なるう本

暮ほき　山樒ふたくちを見む
麻　かまくいふ系の巻　伊む
おのうちのぐりゆくる不とり見て奇の巻拝也

体家とつけるなり麻うりハ俗の仏名なり
さゞ芦苅とも菰苅ともいふべきを麻うりふ
貧をもくとなくハむすしかるまもなるべき
やゝの名をつくるなるべし
籠輿ゆるして本氏の山ない
貴を見てろゞろふ泪ぐミ打うへり
穿輿の人をゆるゝ本氏の山なをなる氏
神貴を見てわゞ多ぬぐゝかゝとなちむと
かなゝめるもつくるものゝすゝきゝ風の人とゝ
体つけ合よや

けゝ尼のゝ坊まりふゝちむきて
をゝ蓮の実 たゝくゝ仏菩の実
体さゝろなし
豆腐つくりゝ母の喪ふ入
文政の草乃 袂も 彼ぬぬ
体ゆゝ喪ふこもる人を体菩の文政と見る
附合なり文政八母ふ者なりゝ人
ひゝとり 書を喪ふる菩の戸ハ弁
二丁ほど西ふこゝゝ
ひゝとり出をよむ菩の戸ハ二三丁も村家をへ

だてたるなべ
榎の風乃一豆がらをふく
寒き竹ふ住ハひゝり柿むきて
米白いゝのも菜さるの負ーげるやゝ寒住
柿の柿むきるる寒竹ゝるがめ
小僧ふゝりぞかーさまりる
牧縮の法ふを加きゝ方ゝの名酒
耒鞭の牧鮮人ふ函を加きゝ方ゝの名酒
を飲きる砂ハふ僧ふゝりぞかーとまりる
玉山方のどりふ大きるのたまゝ

赤衣八多陸のをてる笑ひより
宮司が妻干ー陸ハられてわぶ
前句と八人をゝ八ゝる附合之芋の句八多陸の
もちゝ笑ひー人成見ゆゝ変きゝ方り
後句八花のきゝ多陸のもちて笑ひを宮司
が妻ふ思八れたるとつふか八ゝる之
入月干鵬の名るれわゝる之
賀方き園乃露負ハゆゝ
いゝ方らむ之めがゝ
一論咲ーー芍菜の宮

碁の工夫二日牙くる。目を吹く
おもしろき附合之伊ぐーとよぶべほどの碁
うちの人と半うちけく勝負いつのゐ之
めむと契りちく赤ふかゝり宗のもとふまづ
うふ居て人に蔵ざゆーまを二ねまで立ま
しやりく思ひつきくる赤ふ目をひらき
見れば宗おの苔茶一編咲出くる之
笠袋て衣のやぶまを縫ひゐる
秋の鳥乃人くひゆく
はゝ句や人を殺シウ殺て鳥辺山ぬぐーゆなど

のかくゝをものくゝも思ひたらで爰のとふ仁主ゆ
しき破を衣成殺りゐるとのと見て附
たるゝ附ぐ乃ハまだらく立て一句のやくゝも
秋といふ字のよくきりたるゆぐ之くゝる
はゝくらりくふはらざれば殺る句をはくゝりぬく
りぐ
英人のかくちい 扱むうげろふ
蝦夷の賀耳幸奈れ蝶と多を倦く
王昭君が古るを子くみくの他之
京ふ名高し 腐の咀

[illegible]の松を笠に着く馬ふ[illegible]ぐら
きこしきこえがくるんで強くいりぐ[illegible]白八重
屋て藤の咒詛ふぬを[illegible]る人之怪白ろ
枝指ぐくこの笠乃松を笠に着くるす
[illegible]白くこのやしげなる男八京ふ名をるき藤
の咒詛ふ[illegible]ろ[illegible]ふ[illegible]ろ[illegible]ら[illegible]ぬ[illegible]
やうならね

月面くち圭のひぐき八つ[illegible]
檜 いそぐ 清ぐくの霧
[illegible]白月も面くと面ふ[illegible]ぐきちまを[illegible]

八八ハ時といふものをごきけーきをよく見定めて
人の[illegible]飛る宿中たり
高驛の驛ふ 畠 つくりくく
紅染の[illegible]年花の[illegible]を 徒り
汚のきくなる附合なるべし
汚飲む 姨のいろふ 淋しーた
双ふ八のくらみを 舟に半つくく
汚好の姨より舟の[illegible]ちまふつけくめき
のふた双ふまみくる[illegible]くら矣しきるど
汚ゆてちの風くふハとむらふ人をなーし君ハ

いうにあらぬそのぐ　きこえてるふ　俳　ゝらむ
と思ひやりたるけまり
髮下て　伯　従が　紅をとろ〳〵く
壁の宮乃　ほらし　故ときは　雑
黄白ハ髮下　く　咲　崇りふかるけま
見〳〵かゝるゆえ　ほる　壁の　ふ　岐を
するをつけるゝ
蕊者を　白　新　名月の　茶
面白の　拍　女乃　秋の　叔　さらや
さゝの　拍　治　郎　ふ　ほらで　風　原の　ゆ　人乃

えつぢなるべし
川　淀ゆく　船　を　角ふ　徒　付く
舎利　ゝる　滝ふ　紅　ゆ　つらふ
古　調　なるハ　俳　がゝし　きべく　古　調　ふ　古
調　ならぬ　ほ　ふ　のち　の　調　ふ　古　調　ほりこの　境
ゝ　ゝ　つべし
羽　織ふ　汚を　かく　新　樣　屋
ふのゝ　ゝ　女ふ　蛍　ゝ　ゝ　里
いうるつけぐ　ろよや
写なるし　笛の　いろえ乃　きぢり

三勝の舟　匡川乃　教

松のまを保川の秋をさらねバ解さるるを

はぎ

花　逝（カスカ）なる　仲　こざの著る書

いろ咲百（モズ）舌ハ吹矢を負なぐら

田野之秋色

月ゆく寺板山を負ぐつらむ

雲ハ秋　盆の　法理　起なり

大盆人の人の　秋なるべし　伊ぐ盆人

の豊（トウ）をむ　ぶ　伊ぐ　法司が家ふ入る

何く山を古ふく　なで　起の　ものがくりるも

よくのるすなる

ひとり　色の　ぬくらふ　る

立みる人ハ　薄ふとぢらかく

たるく　立ふる人ハ　薄ふかくるる　ひて

人なた　聖をいつりかくきバ　色の　ぬくらふ

ふるく

風ふらき大夫の　秋は七ッ半

出門をたるく　生　程の　美

茶白ハ大ふの　秋陰　白ハ　夕日の　秋　附　ふハ　伊

里の者ども

宿のたゞ（ミヤゲ）ふ 拍子をほる

ゑ京餐ふ 故の者歌 半分く

拍子を堀く宿のみやげふ出る人を是歌

師と見立くる所白

うバ玉の髪きゝる女房に来て

ゑを見やゞる 鉢ゞの月

うバ玉ハ根とゝ上るの拍ことバなく思さく

らきなのゞまを用ゆ面白の奇にたちちぬ

のかゝきとてしもうバ玉乃わゞ思髪ハ左

でゞやゆりれむといへるを思ひく髪ハもとより

黒きまの者ハ根ばうバ玉の髪と俗諺ふ用ひさ

ゆゑ人ちく附ゞろハふくちぎりくる女の者

ふ者りてりをハかく思ひきくゝ尼ふ者を

たりゆ世ハたゞ者まゞろしの中者ハ

に左うたのゝ形るたう思ハむかくるきゝゞく

しきかくよ思ひ入むすりハのちの世れる

ゝろたろろしハ乃夫を尼ハ思ひたゝえぬゝう

のくくいハむくくまりしなゞゆめゝてちてバ

と一念（イチネム）発起（ホツキ）をしたちまち衣を見やゞりさる

けさなりて秋ぐれつゝふるく　ほのぐらこのそらを
さしたるこ

佐不さて於朝のかづらりふ道

ゆ立ぬく　ゆあみこゑる　渡　男

俳意の御題のりしたなるべし

うちかづく　苔の衾のまくをちふつりを

たりをこく　果と　匝　哭ふゆく

古是八公羽のこゝ　ふゑ高き　恋の白之まこゝふ

恋の情をつくせりつふべし　苔白ハいやしき

ものけさなるをたぐたつりみこいくるみ空

よりほの川溜じて　ゆ下ふいやしくうぬ人のた

ハぶれよいやしきものよねびしたるけまた

なりこく　恋のまゝをのべたるえもいハぬめ

でたし

入日の　ほとゝ乃星　ふゝこつ

合せが　波　捉つも　花の　夏

星ふゝつゝつ　恋の上るぞよみえうあたを

社前のゆふぐれと見くゑるが　花　灯の　陰

つぎよゆくさぐをつけるる　面も及ぐ

落を　ゆく　公ふふたりの星

現代の世風にて麻苧を入篠の際
葉をはぎて笹にふくえを人の船より殺生
負出る山りげの篠の隙ふ見ひとりかさなら
して麻のまるをまつちまにのくまでえをとる人
なりけり

俗れもしらず　椽の粥煮る

更級の里乃きぬをおふゆき
ふもれなどえを人の椽はかゆ煮る俗お
ちらばちらしなの沾おふゆくもろべ
露を相　宿　ゆ　ゆ　凝る馬の血

訪ふとも老とも思はず遠立歩
土の餅つく　ゆ　ゆ　杉ろろし
三角ともただりのてろなーや
生篠に燒つく煙　ゆとなり
日ふして　ゆる　松が　切りけ
山家のやしきるがめし
ふ白なる塩なたに塩をつきぬく
泪年　顔をよごす　目　ゆ
茅白病者の療治のためを塩ぐちちると
見ふく目病ふつけるを妙

舌松ふ念仏をやとふ居士衣
小株ハ稲の中くしふ　つ　え
小株下のけまくえ
枝でくつ産所がゝ　花上まなり
いぢ里ふびむや　蛾花の月
蕣ふいぢりを對しくる附句えれも又一躰
蕣花ふ垣松故　窓つ　単宿
かげろふ　重さ　紐の　下袋
伸のくさも牙子の足後ふ春さちて
かげろふの白ハ苔の切ふのちの白溶ゞて負

しくさ言さ人のさんど一袋さちくる男ゆんど
牙子のかさけりふひひてからさ世をつくるさ
まさ里
水泉のかづら　桶の名をとる
ぜん　垣のふるさ　故ハ　彼まくり
安原意
貴もよむくり　樫ハ黒　石
平安の忍びくわきる　秋の風
黒石の切ふさるべし
餐　さる　音の　月ぞひりめく

もつより西の　世乃松ゆしく
紫なる宵の人〳〵松しならびたる中
ゆ西国れるすどもよく先ゆくる人乃ものがゝわ
きるに紫さるる人のひとてろ所ゆゆく松ゆきる
ちまと
粥ゆ　ゑ子ハ　何とゝふらむ
山茶花の後ハ　水仙　梅　樓
二句とも付るこてろハ多くたぐひならべ
たるこ付合の中ゆハ必かる句ゆるべし　上を
ハよくやり句をきるこさろ多くべし

雪ふ　鞍　れ〳〵　仲　貫が　馬
やどり　七む　大江の　屋乃　八百家
雪に　踏　出る　貫ゆ　貫ゆ　大江の屋ゆ　やどり
隠れ　ていふ　付句ゆ　やどるゆ　ても　れ　さや　ゆ　ゆ
別　屋ら　ゆ　状　ゆ　の　蓋
洗　涙　報　も　先　洗　ゆ　ぬ　室　状　洗
おも　ろ　きつけ　句　こ　度　〳〵　の　状　面　ハ　ゆ　面
ゆ人と見ゝ　ハ　涙　報　の　お　洗　〳〵　こ　あ　さ　て　ろ
の　洗　涙　報　を　ま　こ　て　し　や　ふ　つ　ら　ハ　を　り　か　る
ま　ど　さ　ゆ　ち　涙　報　も　金　ふ　つ　ま　ゆ　く　こ　の　り　ぬ　こ

いとハ階稽の新延なる
宣松が袖千 外も 虚つく
花ぐもる 中も 抱を思ふらむ
二句 変よていづれもをうしき仮なり 白えハ
ささえるまゝなる
森の 柵千 鶯をなづめく
鶯の居る花は 紅屋とよめり
上句のうつまびらやふ二十三年よい瓦べ
口をとづ
敵 ふを 来ほむら 松のそ年

有明の 梨 打 なびし えるゆる
上句 也公の 公高き 附白く 茶白の 柏子ふよく
のめく えもいハぢめ でたし 白の 柏子とふる
をしるべ 白えハ おの子面なし
殿 なが 紅 ぐりつる 紅ばらけ
さげる 眉を かく さ さぬ ぐく
ちしものがゆ よなるべき 併之
除 鄭の 当ふ 思 ひろちふし
待ち 仏の 陸ハ 階 る 菓の中
除 鄭 当ふ 仏むと ちぎりなる 待ちびく

思ひふ一たるゝ内まなる里内ハ[illegible]ゝ結ひひのめて
やゝく結のたるゝ[illegible]ふ事めたるゝいふとて石
の附合なめ、一白ハ結を結て居たるゝが結ら
ひひのめく結ハ石の中ふ結ためゝゝ[illegible]
ふきゝゆふ[illegible]ゝ内ふひのらずたゞ結のたるゝと
ゝをやち一くいひのべたるゝ

京ふ　汲さゝる　碓井の水

む　川やたのくゝいの不見く

凡伝のえきんゝの水かゝの水なゞさゝべて
水をたの一むゝ人ゝ内きバゝゝ玉川のゝいまでめゞ

みゝなるべし

餅(ニエ)つくる猫の慶業を打合を
賛ふ　笑る　秋乃ゝゝ乃ハ

茶白猫の茶乃餅つくるを打さ沖るゝと
見ゝくいけふえゝ笑る人の白乃なるきゞゝ
をつけたり秋の人ハ結の字なれバかゝる
たゝろをつくきり

姉　猫　牛　の一生ふねの新

伯耆ハぬ越の　猪を　織うねく
姉の生さを猫兼る生ふのやゝさてちゞゝ

桜ふむうひたちがらおもひねるちよこ
酒のこゝまて女達の並びねて
の月乃　雪を　掘る　つくづね
茶白八田植の酒もりなるふ雪を掘るとふ
ますをこのいしらひたるこ
思ひぬ　年をうゝふ　傀儡
餘中　ふたゝくる　車のふ屋を捲て
松年　ろき所合こ車の中ふねる人八おもひ
の所る人なるがら傀儡のゝふ年をさゝて
ものやつが多の上をゝふよハ所らぬうと松

ろゝゝゝてゝ車の屋を捲ゝるちまふ所
たゝ　おもふ人の年達　住うゝかゝのごゝく
ちらむ
老の身ハ傀なふほどふほろめる
君　流ちを　　孫の　年　ゝる
茶白老の身ハほろめゆく八老ながら傀なふ
ほどふ松ゝろへゝるハひとゝるゝならぞ　おもふ人
ゝ見ゝく極老の年ゝゝ　なく世の中ゝ
だして見さへ流ゝ水ぬひ　ゝ　ゝの年ゝるとふ
ゝゝく傀なのふ　ふほろめゝゝ　ふゝろめを云

らーたるこ

木の葉ちる 榎の実も 秋の月

峰乃くびきの

つくゝぼうしぬる

荻白木ぶらーー吹立 榎の木の葉だらーと

ちるものさびしきを 砧ふと見えくひ

ものゝぶーたる法人の何ゝ鳴るゝ(をつけ

たるこ

心葉をくむゝゝく 霧ぬりゝゝる

火ふりーーて ゆるをのこゝ 何者ぞ

荻白川ゞのうひさゝゝ屋ふ夜ふくるまで

雁もやらぐゝりゝゝ きのふ葉こゝをゆるふふ炬をど

ふりゝゝゆるをのこゝ 何者ぞゝゝぶめゝるけ

たゝおふけるゝ何ゝめ さほこ山ごえの炬ひ 聖ひ

らひか炬ゝなるゝ屋ー

ちまゞくの虫れうをゆ八重月の氣

人一代乃 夜 秋 ゝふ 秋

さほゞくのかをゝめゝいふすめ 次八恋の白と

ゝゝゝ月のおふれのゝ ちまげきのがゝ

ーてたゞひよをさなる死時すめの夜をつ

まゞものがゝるちまこ古 法すもかゝる侍

百里おきしろき俳諧なりけり

下戸をにくめる雪の叔乃亭

早咲の梅ぞ茶釜ふたと〳〵たり

茶白雪の叔乃亭に結などつくり酒あり

きるゞ中ふたりゝ戸たるをのこをそしり

ばりゝ中ふたりゝ戸たるをのこをそしり

をあるふたと〳〵おのれと杯のれば叔乃亭結人

俳徒の情をいへり

明安き叔ばまきらが　後立く

なるよをを　時ゆゝ　ほゝぎすやら

よきこハをうきつけぞ乃之茶白碁の叔乃

明安き叔ばまきるよりほゝぎすをやうなし

く後立げよりふ階能之なるぬをくらさき

うぬをかゝつ風流孝一のほゝきれば加ゝ

くゆゝる風流公和ふのらぎゝ後そや

奇よをむけ名月をたぐよやハ

ぎるかるのゝつぎ叔西て冨士

茶白けぬ名月をたぐよやハきぐきべれ伝ば

ふこの奇よきゝなぐつふさをよ後白ハきでよをの

奇ふきる使の蕎麦もちて冨叔ゝ之切

さぐるともとすりかくるる所をあんどそ
ばのみつぎばゝりハゆるさてあらむとをゝく
いひたるゝ

稲妻の光るゝ束をバ筆投ゝ
四十ノ わゝれ作 袖をもぐ
茶白ハ増居るどしてねうきゐる不へ稲妻の
光り来るゝ筆をも投ゝ
ぐゝあんどゝ惜白ハ袋中ゝ潜ぐゝ立とし
わゝれみ作袖をぎゝもぐゝほどゝのせつる
柄ゐるかへたるゝ

ゆゝふ屋平かるを借る旅人
余ぐゝゝふの主奇哉 嚊平
附ぐゝ乃ハ旅の主奇師の迫れわゝりのゐ
ゝふ下りゝゆるゝ所るまゝ奇ーゝ者て旅へ
ゆるゝかるゝりわゝるゝ片ハバゝの日れ主奇を
懐ふーゝまゝゝよわゝが余ぐゝ方るゝふけゝ
はちまゝ

汐ハ干ゝ砂ふ舟ゝ須ゝの浦
日毎ふかゝるゝ家を茶ひゝ
須ゝといふより原氏抱須ゝの岩ゝふか

の須ハ如ことろ人もさみりれ人ハ里は
なれいとこそろぶそくくなどゐるをも祝ふ
ふくめるれちハなのくとも左ゐのさぐこハかる
ものゆり

と会ん事とゝ体 描の本乃中

屋(ヒジリ)して手(アシ)ねなどくかられ月もそつ

描の本乃中ふう事とるとゝ会ハひろふそ会陰
固の人ならむとかくつけるそ西行の撰集
おなどの歌を所べし次の句稼えのやう
ふいひけり屋を法師となりく歳乃

中の月をもそつと何とかく稼え稼伝ときさ
こゆるゝ〜に所のやなしたる之世の仏諸を法
さるものかるゝをも何くの稼伝何くの
稼えなど片ぶくふ解まぐるハ仏諸〜らぬ
ものさりぐなりもし此句よも世よまことふ
稼えを稼語とをバろれハ稼えを稼伝よてこそハ
礼仏諸ふハ所らぐ山ハ稼伝よかぐらぐ古ゐ
などをふくめる句ゆても底ぐろと形ぐろ
けく併のこゆるよてころをそ〜れろちつ
けよそのなるをいひつけならむハいとかく

くなるべしかくるゝの八ゝ茶時ゐ物こいつるも
のゝ従論ふるゝくいひつ
目茶のりゝたそのまゝ詰ふ仙り
八ッふたるゝ子乃顔はげあ至
さぐふはつけ白ゝるてもはき目茶のりきを
たちまち詰ふ仙ふ才子のわげゝ見て至戒
なぐのゝ成座ふハふくめんどろのゝハ於く
とをさゝゆるやゝたつりたるものなりたさ
はつけ白目茶のりゝをろのまゝ詰ふつゝ人
を大人ゝくハをゝからだ才子のわ児ゝ見

たるホ物之心をつくべし
小畑ちびゝたる窠山子（カヾシ）仙らむ
ゝるの戸れ馬を酒（カヵ）傾（テ）ふれさへらル
をゝさ消白ゝくゝろ何まを茶白のゝ
さ風粗のさぐゝと見ゝかぎりるき豪飲（コウイン）
粉遊の人をつけゝり日ゝ数升の酒を飲
ゝゝれ價ゝ何ぐたのふるゝあらだつひハそ
のたのふ馬をれさへゝらゝるゝ世を酒壺の
間ふかゝるく祇ぢけ人なるべし
酒ふや高（ガウ）の居（キ）の名ふ来りるむ

代ふ出る　海苔　さゝゝふ汁

茶白世の中乃俗おをきみ〳〵てろ〳〵りるる
ものだりりかんんやふ話りりのふ内きを高尾
はの友といひたる〳〵高尾屋の家とてさひ
ちきふふたと〳〵たるるりりのりかぬ〳〵バろのん
をきふくあり悔白ハ水をふ水ををつけて
たぐそのれ時ふるを白ハきるの〳〵ふらさ
んなし

紐白の音ゆなぐら赤いびき
月をほし〳〵る螺貝の酒

苔の白紐白の音乃大なる音を守てきるり
ず高軒かさ〳〵ぬ〳〵ぬりたる人ハ高塀の後
の碎砂と見る〳〵螺貝よて飢かしたる大
丈夫をつけるるとなし苔白赤いびきと白の
音をさしあ〳〵碎ぐろるようつらと紐白
辛螺からの使ふ流る　蓮沢
角白ろる眉ふ　化粧さる表
使ふ紐えの拉ふ奥のふさ高ぐさもの
老のけハひといひし　たぐひつけぐろちぐ

うならさで

海苔出る川口

摎干ム頤なでらぶ夕さぐみ

苔白の坂ふをさぐふつけく水棚の摎干ふ

頤うちなでらべく川口の出入船をなぐめる

けしきと

初月ふ釣星の既乃川面ひ

落ハまねく荊 袖ひく

嫁のり面ひさる主ふの乃く思ひやる度

落ハまねき荊袖ひくハ嫁のかなよさ

なるべしをうしき階誓のつけ句と

わるわり舟相き的方ふ山ゝ天く

陸いくところ乃 西ゝ 東ゝ

肥苔の山河 鄙の獨形

涙をろえく 袖乃名をつらく

誓けづる 熊の袖乃名をつらく

苔白涙なぐらふ 便形一首よみる鄙人の

情乃せつなるに 後句ハ奇のこの句ハやふ

去さて誓の袖乃名を 熊のこつふをつら

しとくかく 獨形ふよゝたるちまるつみる

なり

くさ手をれてたちもかへぬ

又乃軍　敵　起ふし　の巻

くさ手のたちもむなしくるるといふより又

八軍ふ出たつぐらはれのが身八夜ふ入て又み

ちぐふうりなぐくちをしき月日を送

りくく起くきふしくも又の軍を巻る

巻子の時をつけるこ

三度　ほし　れれ　勅　のち宣

山ちが車ふけづる本を巻ひ

かれふ酒ひくくとみことのりのふちかくけ

を三度まぐく降る不ふのくこ玉たぐく

思ひをて山ちるふたまりりくこつけくり

夜やれく月八むりの紅ながら

老りむくだが　紅くつ　ちる

菊白八末梅花の巻乃れもりげをもふくめる

り後白を其切之

道の名れ松ふ　一喝　志めし　玉

七　若の　興　平　沓を奉げこむ

苔白八たくまき祥僧と見く名若をもの

の数とも せさで 興ふ 習を 投こしたる 粗 腰
ひさげ〻をつけ〻り
葵ふ 短冊つけ〻 於やり
盃を 省 負 ちご 臣
つばくらふ 短冊つけ〻 於ちる 花ふ 盃を 負
ハさて 何ゞ 大なるなどいふもの 拾びたるべ
しまれを 仮の 對 附なり
碧 張たつら ふ 宮ふよらバや
打 投るなるく 菓の名をとき
附〻 乃八 菊をきらひ〻 陽 乃ふ 碧のね

乃きこゆる 宮ふちすり〻 於 みる 百に
大なるの 菓の名を 忘れたる 之 赤白 優艶
なるなふ 次 やちしくつけり
酒ふ 奥 何〻 ある 友を 仮つめる
ぬけ 初る 又の一 歯 乃かたなくく
はつけ 白 翁ふ れわき 拾なり 芋 白ハ れ色
ろ〻 酒の〻ら 凡人なるを 川 猪ドて 父の
歯のぬけ 初るがかなしいとつけるもの之
ちれど 無理なら ぞ 又の 寿賀 或ハめで
たた 打ふふき〻 又のよハひのかゞぶされ

はをかなしめる若子の情之かく茶白ふつゝハ
れぞ引とゝなるくつけるハ名人の手段なり
去このゝぶでも勿論茶白の拵様時のよろし
たゝふまゝぐふ屋し

山ちるハ屋も　狐の竹ま殺ゝ
花とひ来やゝく酒つくゝほらし
屋も狐のほらぶるるハよわど山ふるさゝと
見ゝく花ふ人のゝ入りゝく酒つくるらゝと
つふけ合之茶白のゝろよて山ちるハ何れる
のちひはゝちるゝゝ　ゝ　ゝ

俗じゝく大地の山ちるはゝらきゝ
白さ　故　塚の　垣を　乗ゝさて
俗ゝゝを　探の　拵ふ　筋遠て
茶白去日のはゞゝなるにひらゝゝ故塚の
垣を乗ゝさて竹まを出乃なゞゝ見ゝくよき
日和故見ハ何ハせて俗りゝ　れ何ひなゞさる
女のまわゞをつけるゝ
調なる記念の敵ちるも出ゞ
何も　焚　火ふ　皆つゝ乃里
茶白ハ天敵ゝいる猫もの俗之悔白ハ人

の方へ別るる道の所なるにきまるべき
はなり

紫(シガ)揺 和し 立の義 傳

木(キ)兎(ツキ)の松のが 碓や ゆるぬらむ

たゞその坂下れ附合之本兎の苧を碓ふ

一名あれ階督

才りの傍宴中ふにくまれて

燒こゞし たる 小縷もうみを

ぬ人めるの情をつくり平生に数多く

おいひけ でなどしく傍宴にまるまる女

のたまくゝ小縷燒こゞしたるをさみよのさま

ふいひたるゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

船 遥のけく 晴の 喰 鉛

青やゝ八ならぶる和乃ゝ

ゝもるゝ しまりをた其教のはりけま

世にハ有るる

却 おゝを白田も花の本傳て

つらも毛ゝ小 露の 和 わる

春ゝ日ゝ茶とうバ才二茶より高べ

教 遥 たゝ たゝ れく毛 指の上

ときしびの新めづらしたきの天狗
もなかのとふ殿見たるみ童く藤もきぬやう
さてさの天狗と思ひよとるく
いうやうの恵もたつべき落栗
琵琶を加へ入る　出る栗ね
古ものがたりもはるべきれもりげを思ひよ
せうく琵琶を加へ入る栗ねより生る人
ハ何ぐの男乃いろこのくあるべし
篠ふく下る紙　紀の坂
宗長の憂寸　白も筆の係

附えきこえるやうよて一陸わざやうあらず
紙陸さ袴ふ秋をうち　紀を
紙賞の白紙を見付たり　見付たり
前白袴の紙乃陸さをうらあるとつふを秋
の字ふ心をこめくく衣の舟ふろぐハぞむつ
しく杉ゆるハ人の老るありといふとりて
たどめくく紙賞の白紙を見付て老を落き
よしをつけくり
わが顔ふ花ねうりたる梨の花
紙ふ紙袋とつけし　さうづき

梨花のもとふ匹きりきる人ならバ故障と
いへる盃ならむつけ句のひぐきぬといふ歟し
てふハ俗の化名なんバいうもなづくべきな
故障といふよてもく新ふ花のちりかるり
るがめ一実ふふらしく味ふべた附句之
蘇東坡ものもの里ハ古くとまらだ
栗 稗を日毎の 麻ふ喰ふ 飽く
あみといふ一字ふて僧とさる世ものもとより
も捨身の行なんバいうなる里いうなる不よも
いるべりんどさそぐる肉鱠なんバかくなる

里ふハくろとまらだ毎日の栗稗六ハうむど
果るるちまいとをこう
叶秋も門の板榕 岩ルり
ひとりりる同
赦免ふ赦ふ赦ふ
茶白法先くふ家の柱も岩を株木も朽く
門の板榕も岩るといふ所さ不を恐
と見て赦免ふ赦ふ一人とりのとちきし流
人をつけるる儀寛が併も所るべし
もとの廓ハ畑ヲ 麓ハる
宝記乃春も一ふふ所ら拓まり

なの白むこの〜ハ花世町うく鰹之義なりし
ふもとハ名のゝ海なりゝ後ハ梅畑ふ形りし
お撫り量こつるけまを見く金沢も所ら
たまりしとつけるこ廓に金沢とふひ
びさなり
さの雪ふ失所ふれとや釜掘て
麻巻なすぐらふ化粧こつくし
茶白ハかこひなすぐふ所つ屋りて蕎麦など
たてたる雪の敷なるが内て言し失えばらく
所ゝらむとゝく答なげてよりかゝりこる風流

の席を恢白俗の川狩しゝく左京なのごの
拍女乃新屋としたるつけ合こ
蟷牛の殼を踏つぶすてる
身ハ蝶ハ所なるこいこ名や笑つらむ
ちらハちゝきゝ附合なれど一句をくし
いひのべたり蟷牛の殼を踏つぶすふふ様も
ともふ踏ものるこ様の所なゝいひけり
ぬたつ教月を行依れそる見て
出泉筆へる 侍奥の秋風
ふも亜ふろのをつけるちゝ花附句

ありり

ゐる時ハ餅ゐもゐなの入ぬちむ

樟の小枝ハ意をへだゝゝ

前句ハうき意ハ思ひしづみゝゝ餅ゐもゐの

入ほだりなる之後句ハ餅といふハ樟をつ

けゝゝ意をゐつゝひたるゝ

霜降山や名物たもうげ

ゐるまりハ軍をいたる所ハ来て

山ハ意おのゝゝ所ゐる所ハ名物の面影の

だゝゝありゝいハ古さ俗でげなる物不

をろのまゝつけゝゝ軍の出立を家まで送

わゝゝつゝハの酒をめさるゝ

蓑引雪車ひゝ筋の後有て

れのゝゝ武士れ名ごゝる宿

前句ハ小越の大雪なるべし後句ハ小国の

堪を攻むと大軍たろひ事ハどもかの大雪

小馬の蹄踏迷べゝもゐらざむなゝく武士

れ名ごゝりねてゝ寺をまつ古ごゝよや

宮小百姓ハうゝ名ハ

寺枕千両寺枕をけし入ゝ

前句おもしろくこゝのかの法師をゆるしたる
まゝはらをし女なりけり後句はそのまゝそのる
ゆくわかなさ敷のほどをしりぬ
住かへる宿の柱乃月を見よ
二階にうらむ人の来が然
いくつもの解しがくし
古山つゞきの森ふしゝる
淋しさや河ぞもをしく朱まゝふ
附句もつみ立もきゝえうるまゝ之色板と
なりてハ河ふ入る人もなく古山つゞきのこ

哭なるべし
花さをたるふ拍子をみちびきて
俤の迷ひ乃 内むる 表風
前句ハ馬ふ乗ふく拍子と人を送る内まゝ
後句俤の迷ひの内むるハたゞ砕の内むる条
水と拍子をみちびくといふふ迷ひのさむる
とひゞきをなるゝさゝろをつくべし
馬市ふ行く 狗むりへきむ
禁ける父が弓 筆をとりつゝへ
附ごゝろ馬市ふ出るほどのものゝ弓筆もつ

ほさいなる花なりしかど弱むりへよハいつもく〜年
久〜く出る男ふて父の代より法ゆゑ
ちゝ茶をもはつゝへたる古き家なりむか
雪降ぬ松ハ松のかとふとゆゑ里
萩 路 志げる 秋 乃 妻
茶白ひのりのまゝ之恢白を除き山と見てい
のゝと思ひよりたりゆゑ秋ふむといふよりり
妻と立て志ひるを志ろるを松ろろ〜さけざ
ものをかくやけしくつゝゆたるハ名人の段
なり

庭 洗ハむと家ろ〜ぐなめ
萩花の今ハ衣を見をぬへ
いりなる附ごろろよや
杜丹の 七下 風のゝなめ
老僧のいで小ろ盃ちゞめむと
苔白園の杜丹乃夕雨をふくめるふらく
ろよき風ぢろよくと吹けーさいろよを春
の庭と見ろく杜丹見の価まりをつけると
秋更ろく枝子ふかけむ菅の公
〜ひまをるゆみ波の谷組

拄子の伺ごろもなるくく帰れ奇くくひす
はきるゐりれなるはまをのべるつけごろ
ならむ

はし 楪のをろふ 見ゆる 箭火
李 敷 供ぐの 著 も 疎 よく
はし 楪のすろふ見ゆる箭ハ供れの著をとるか
らむとの附えふやや
牛のゑふおいろなるさむ夕ぐれ
ゐ雲こまし ふとをろの 喰
さくえがくしまひろくさむとさらバれろらく

ハひがきくせむ
松むをびれく 函の 境目
永乐のおきる 頃をいたできて
永乐の代すりれ朱下たまりめくき傾
伏載のるなるべし 附えハきくえるまく
なりり
捲上る 屋ふ 兒の 這入く
おづらふ人平 告る 秋風
二白の上合涙も落ぬべし 竹を 捲上れば
兒乃 這入にちるハその母なるのやうふ

たるに秋風をいとひたるけしき

涅槃いとなむ　山信乃塔

採茸　村ハ浮世の外ハ春ぞ

ほさてゝ乃なし　たゞその名ハ春ぞ

星ぞふる　紫なハ水　紫なの　かゝるを

素平　姫女の名をとゞむ月

其白ハ星ぞふハわらき人ふかぎらゞ　紫ハ春

紫のかゝほまゞく　ぞあるとゝ　恋白ハ　七夕ぞふれ

ゆく　奇よゝ　或ハ　古人の　奇をもて　ものそぶも

の　なれバ　素ふ出る　姫女の　奇　誠　哀　哀し

かつハいやしき　姫女　なれども　奇をよめバ　素ふも

入ゆゝく　名をとゞむ　ものよとゝらやゝ　たるさま

なるべし

第　春ハ　出ゝく　家　路　たゝる

孫ふゝ　咲　本信を　量のかげろひる

けのゝ　ゆゝ　なり

雪　みゝ　孔　河　その　市　名　絶て

雑　いとの日を　雪　庵　の　ゆ

雑　ゝの日ハ　四　ふ　居て　も　たゝ　ぞ　と　る　庵　ふ

ゆゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ハ　俗　俗　の　連　年　ぞ

いふものなるべし　俤ぞろへ　ゆらる
やまめ　鳥乃　岩ふ　映　俤
平つゝゝ　翌(アス)も　越ぬき　花の峰
俤意ハ名所の名ふをふまえて　翌ハみいづの
つゝどとの峯をこえむと思ひやるふる
うたなるさてろしゝくやまめ鳥のなをきて
もりげなきをみを　おきき　妻よさるれて　きこき
ゆふ　松もむくよゝろがろき　旅のゆふ
ぐれなるらむ　ちれど　花のれなれば　なぐれ
むらゝも　松ゆゝしのつゆぞろ

数くふ　松の　正乃　指つきく
陵　千ゝつまれ　素わらひ　顔
ゝれも　俤の　篇の　俤合　ゝ　赤白ハかぎりなき
松ぞろ　指つ　くだりなるをわらひ　ひげ
ハ　注ゝつけ　れむ　ゝ　ゝ　つきたる　白よて
数くの　松を　いひつゝく　位ハたぐひ　ひにけ
何ひゝくいゝひ　ひぞろよ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃ゝよ　松ゆきゝ　ふゝくゝゝゝゝゝゝをつくべし
鎌の　羽を　むし　蝙蝠(コウモリ)の　翼
春　ゝ　ハ　数ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

茶白やたしく白いろ小なるふと見くく見の髪
ろうる者とつけたりめ 鎌倉の新ふ見をすえ
く 刺力いくぐさ そは情いるよりり小なるら乃
らむ打うら寄面は面へ傳くさえやうなるふ
見のうらハ後うあ志づづく泣ざらむかねて
ハ鎌倉の新ふ鎌の羽をしむを見の髪ろ
ふふたへたるえ
御道ハ髪のなたまで切せゞめ
松うさ 打ふ 武 信 のちゞ髪
ひのりのまなるゆ俳合ならむ

ちまくの外ふいのるかねて
出倍しく常なき志あも見ぶらむ
茶白ハきくえくふまくまてつけぐろハ怪異
などの俳ならむう君のあびゆきあふふに
えくぶひて君の変乃うらやなしさふ常なき
形くまでもたづくくきのゞくくそきふら
へなどたハおれひたるさまくくきゆ
新づとめ妻帯する の 陸 乃 奉
くふも 今 と 路 乃 と 今
茶白ハ叫 佐 さなどの新づとめふうちるらきて

陸の奥平乃きさゝゆるふ奥をを歌じて時の
さ宮のりゝゆきほてをと伊ふ人本のびゝるらむ
とゝりかゝたるるゆをつけゝるえなわ妻帯
まを峰と見てる俳会え
おぼろの格乃霞不の月
ものいへば本意ふひびく春乃風
けきるえゝ本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
樽を おきまる 塚の伊らせえ
紅をおいしたき出を化粧らむ
俳ぐろ乃人を埋める塚の伊ゝゝめをえふ

紅をおの松くを見くよりなき出ふをおの
おきゝゝゝうしばふけりをすいらぬす
なるふゆゝふかなのしたのまたるなりをい
へふゝや
おゝしめむ屋を信ふ出を
月けへ凄き 陣中 の 市
お白おゝハしめて料理ををき屋を信ふ
いけをゝゝゝ恰白むぐゝたなるゝゝをを
屋のふふ面らぐゝ陣中の妻物とゝ人さ
ふをゝゝらをを

小袖 袴を 縫る 戒の師

わゞぼむの母ふ似るもゆしくて

赤子の乳戒に小袖 袴まで戒師より起く

是をきるこゝかゝるおちごよつゞくこゝろ

わゞゐむの親の母ふ似るゞゆしこゝ人姓

をつくきる附合なり

おふこの京拍つゝかたる古今集

花に対きゝ原 坊の 酒義

前白いるもちこゝにいきき古こ集も

何るだし 附ごろハその古こ集もち

たゝるハおふこの坊と見く花の沢ふ坊の酒義

をひらゝこ

春だね 新きゝく 鼻ふ京

孫木をつくりて古記京を見む

春用きる不をみちのくこゝひよをていふ

しへのめく孫木つくりて古き世の京乃

ちまを見くおこいふ附合なり

眠くハ豆の 陰りふ公豆ぬぎく

百里の旅を 本曾の牛道

目前の旅 紙

豆くゝぬ 枳ハ 何と なく 思
古れ所を 寺ふ なる 桂皮葛（ヒハダヅキ）
古ち不成 るに 成 たらむ ハさハめくもの
さぐく 思も あらむ 花の白ハ 笠ふ のおの
外ハ思ハ 何とい ふて なくらむ の 偖 稽之
月見よと 川 起さ ふ 砌 さ
繁 ゐ ふが さくる 薩（ウスモノ）の 立 物
前句 なりふ たる 人をさぐりいぐ
たゞきものゝハ 走 ぐ 起 ゝ 月をも見ぬへ
りとは さりハ とちふ るが 砌 りきとと

接句 やぐく なる 人と見くめ でたきさま
をつけ る之
的 砌の 末 午 咲る 山 吹
春を 留 し 七ツの 手 乃 ちらち 石
七ツの 手乃 ちらち ためし ふ引 よ る 石のを
とな ふ 形 りて も 立 ル ぐ 思 ひ 出 さ ほ な る べ
し ちらち 石 的 砌の ゐ ゝ わ ふ ゐ る べ さ ち ま
なり さ べ く か る る ハ 武 家 よ ハ ま く ある
る く 的 砌 と ゝ ふ ふ よ く つ け ゝ り
かさ 消 る 茶 ハ 聖 中 の 地 花 よ て

つるたる山犬の牽

前句ハ地中の根茎の蔓ふまるゝふとゝ
階稽なり後句ハ地宿などゝしたる人を
見くの附合之

昍子 松ぢろしく片萩の宮

盗人ふつゝそゝふ妹が分を泣て

前句よのつねぬけ田舎のけまなるを引
捨ぢく盗人の宿の昍子ふ去らへたるつけ
句なりけるろなるなるべ盗人の妻となりて
身をくやゝるゝろ所ふれむべし

萩の墨 俗の宿 価ハ 注

ものいへバ小笠ふ顔をかしいを
前句宿価に萩の墨ぬかきたる風流の
きぐたりよ去りる人乃面新なりどた
しふ注とも片がゝきやゝきを後句ふ
てハきでたきのいひりけゝれバまゝふ去る人
りゝ去ぢしふ笠ふ顔ハ一ハて去らぬ
かゝふもてなしたハむるゝ片まゝ

盗人とハた 二十ばりいの里

松の松ふ笑をならべゝまゝらむ

前句何とかなりぬどとろくの里といふ所の
所やしたふ盗人のをるべきふとゝゆ接句ハ
きたかたちのわるろしたふよふ十六新あど
いふものゝ雖宿してことゝ大とゝの枝とい
ふよて一ゝかとこいさやゝを見えたり
所の月も哀ゆきふとて独ゝ月
雪ともさゝえぬ 猶のいさきに
哀のまゝをつくさる附合之意所ハバ
ところ月を見ゝもかなゝ月といふ月不
雪とつけて雪ともさゝえぬといへるいとかな

衣をきて〳〵 猶きく 世の中
酒のめバ谷の 杉本も 佛なり
句の杉もて八衣をもうちきて〳〵きのゆもかま
ハぬをゝを敬免の座位と見ゝく酒に酔
たる目よハ谷の杉本も佛のやゝにみゆると
いへる附合なり水ど所ゝろハ衣をきて〳〵
世の中を猶くきてまむといふハもと仏ある
をゝゝ杉表ハいつハり独ゝたるとゝて杉本
佛なりとつけゝるゆゝの本既たるべ
洞(ホラ)の地 義ふ 心能る 表句

芭蕉の葉ハ稿の泪や深つらむ

山陰菊堅

冬を隔てく流人 紫刈

ゝふも又秋日を抱む 石のゝへ

まことふけつけ白涙を為まべしとゝむと

きゝしバかへつく意故損ぞふく 黙儀

芭蕉公羽附合集俳諧上巻終